

多摩川水系河川整備計画【大臣管理区間編】(令和8年2月変更)参考資料集 目次

章	内容	P
2	<b>令和元年東日本台風による洪水</b>	
2 - 1	<b>令和元年東日本台風(台風第19号)を踏まえた対応について</b>	… 2 - 1
	令和元年東日本台風(台風第19号) 気象概要	… 2 - 2
	令和元年東日本台風(台風第19号) 降雨の状況	… 2 - 3
	令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況	… 2 - 5
	令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定	… 2 - 12
2 - 2	<b>令和元年東日本台風による洪水の被災 河川の被害概要</b>	… 2 - 18
	令和元年東日本台風による洪水の被災 河川の被害特性	… 2 - 19
	被害箇所の状況	… 2 - 20
2 - 3	<b>令和元年東日本台風の出水に伴う環境変化 出水影響調査のまとめ</b>	… 2 - 27
	出水影響調査 調査概要	… 2 - 28
	出水影響調査 1)植物	… 2 - 29
	出水影響調査 1)植物群落の変化	… 2 - 32
	出水影響調査 2)底生動物	… 2 - 35
	出水影響調査 3)陸上昆虫類	… 2 - 38
	出水影響調査 4)魚類	… 2 - 41
	出水影響調査 5)両生類・爬虫類・哺乳類	… 2 - 44
	出水影響調査 6)鳥類	… 2 - 46
	出水影響調査 7)まとめ	… 2 - 49
2 - 4	<b>【多摩大橋周辺地区】令和元年東日本台風による洪水状況(洪水前後の河床変化図)</b>	… 2 - 50
	【多摩大橋周辺地区】令和元年東日本台風による洪水状況(洪水前後の河道変遷(航空写真))	… 2 - 51



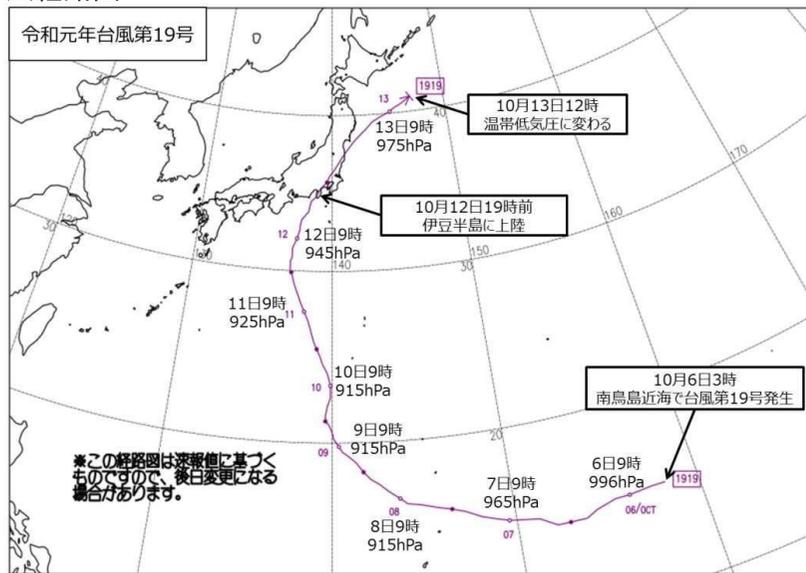
# 令和元年東日本台風(台風第19号)を踏まえた 対応について

令和4年10月3日  
国土交通省 関東地方整備局

# 1. 令和元年東日本台風(台風第19号) 気象概要

- 令和元年10月6日に南鳥島近海で発生した台風第19号は、マリアナ諸島を西に進み、一時大型で猛烈な台風に進達した後、次第に進路を北に変え、日本の南を北上し、12日19時前に大型で強い勢力で伊豆半島に上陸しました。その後、関東地方を通過し、13日12時に日本の東で温帯低気圧に変わりました。
- 10日から13日までの総降水量が、神奈川県箱根で1000ミリに達し、東日本を中心に17地点で500ミリを超えました。特に静岡県や新潟県、関東甲信地方、東北地方の多くの地点で3、6、12、24時間降水量の観測史上1位の値を更新するなど記録的な大雨となりました。

## 台風経路図

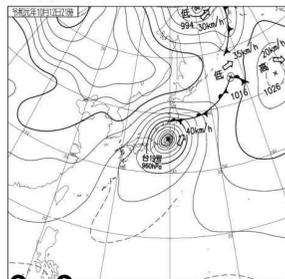


天気図

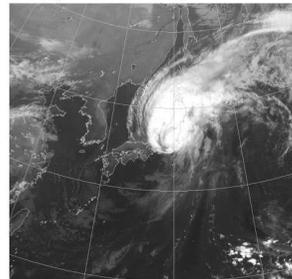
衛星赤外画像

1時間降水量(解析雨量※)

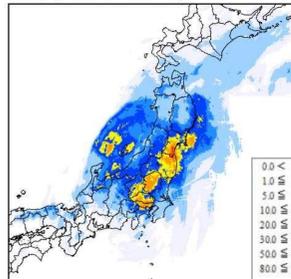
10月12日21時



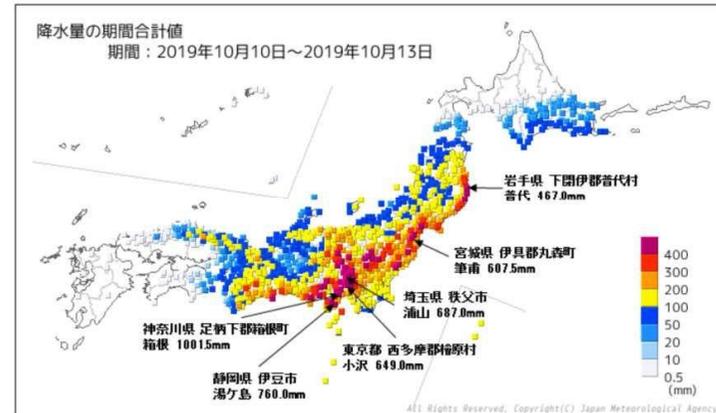
10月12日21時



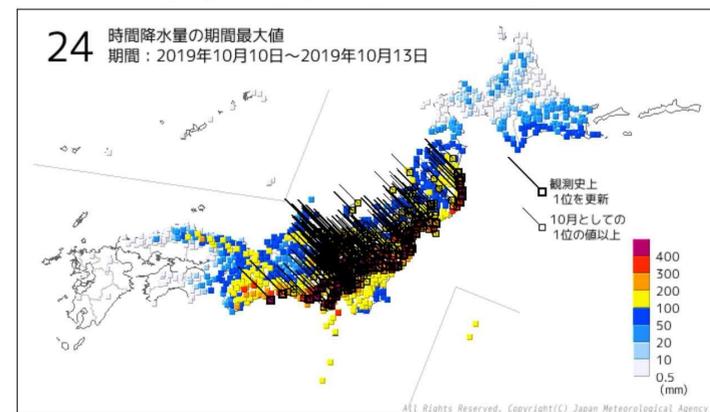
10月12日21時



期間降水量分布図(10月10日0時~10月13日24時)



24時間降水量の期間最大値の分布図(10月10日0時~10月13日24時)

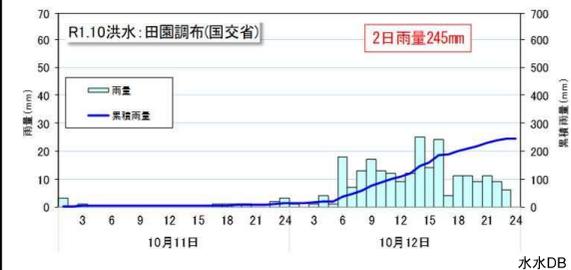
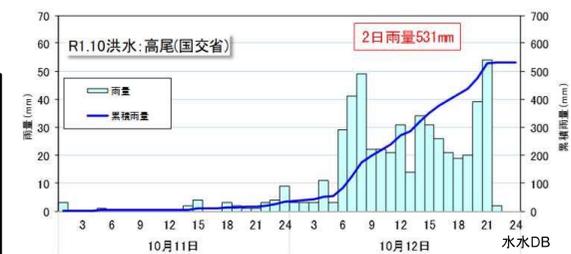
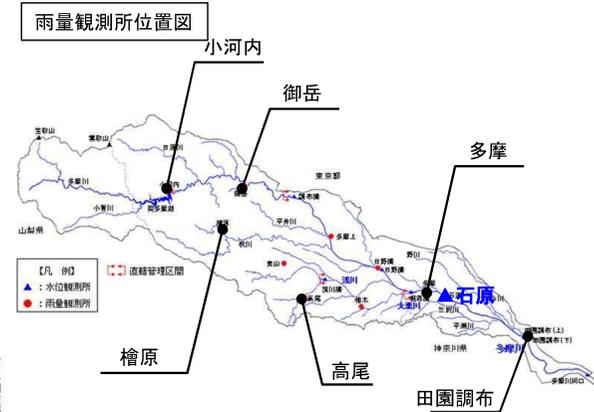
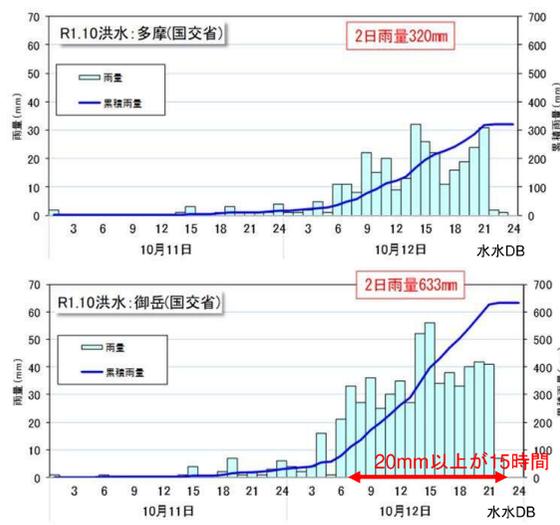
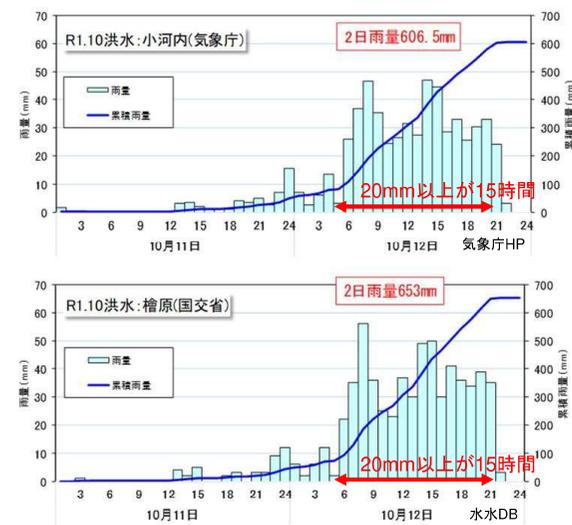


2-2

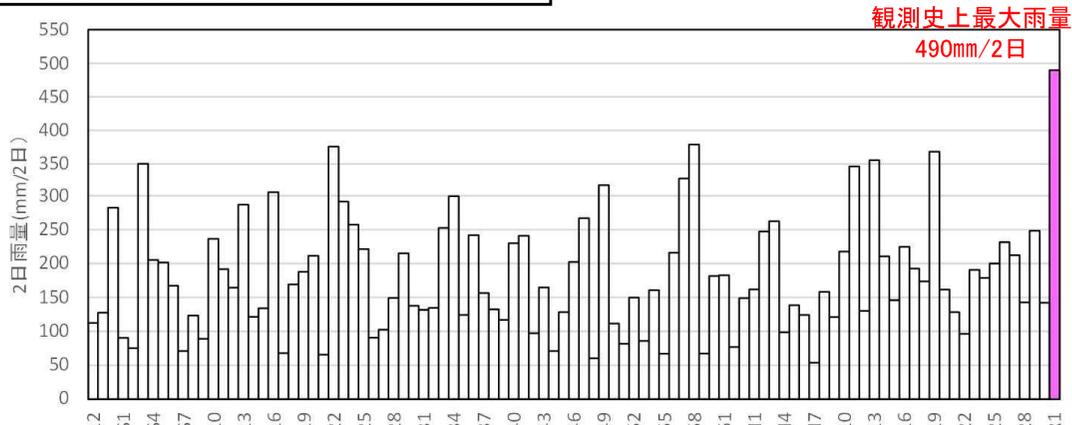
# 2. 令和元年東日本台風(台風第19号) 降雨の状況(1)

- 多摩川流域では、降り始めから約36時間降雨が継続し、1時間に20mm以上の降雨が15時間以上継続しました。
- 石原上流域(約1,040km<sup>2</sup>)の流域平均2日雨量は490mmに達しました。
- 石原上流域の流域平均2日雨量として過去最大雨量となりました。(統計開始:T12年)

令和元年東日本台風(台風19号)ハイトグラフ

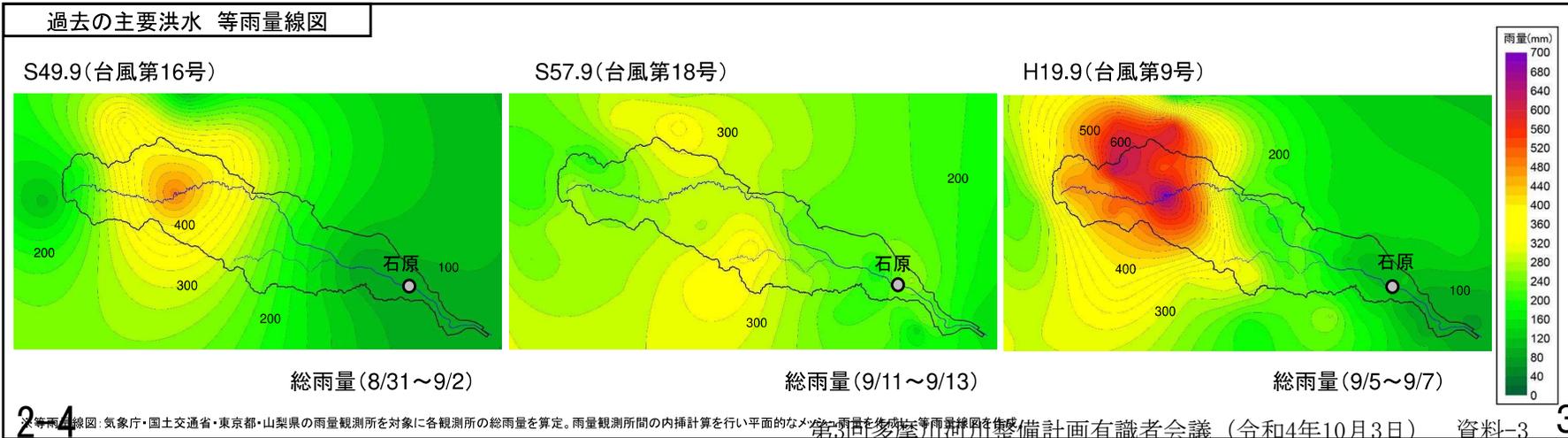
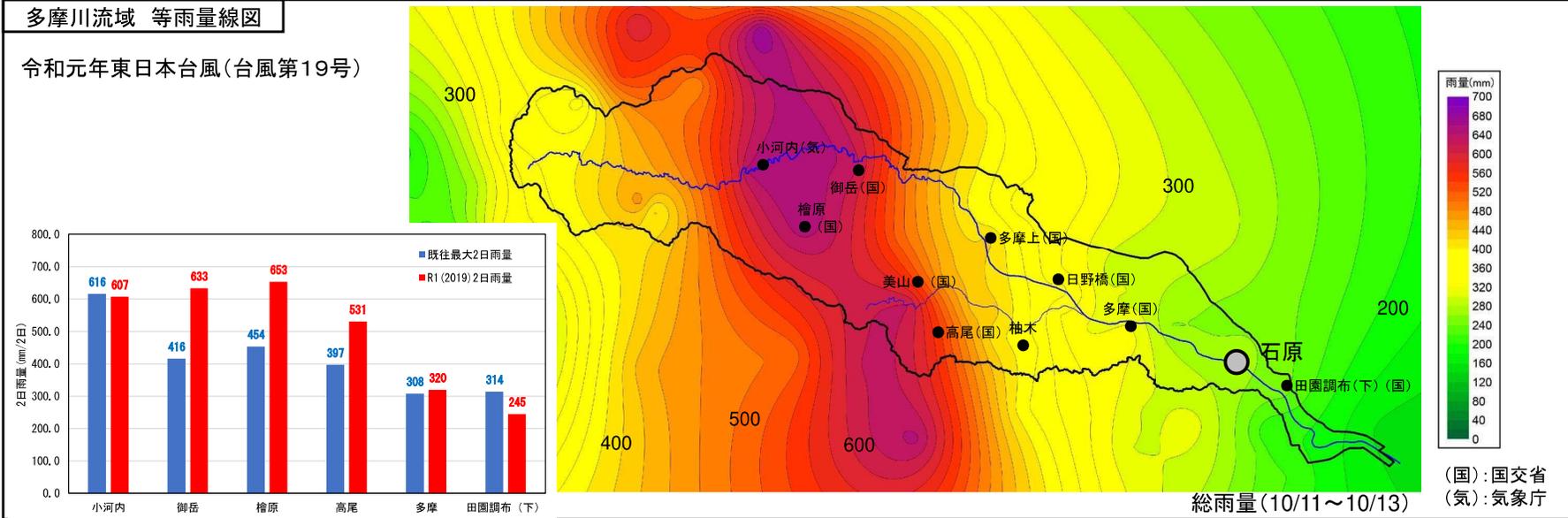


石原上流域 年最大流域平均2日雨量の経年グラフ



## 2. 令和元年東日本台風(台風第19号) 降雨の状況(2)

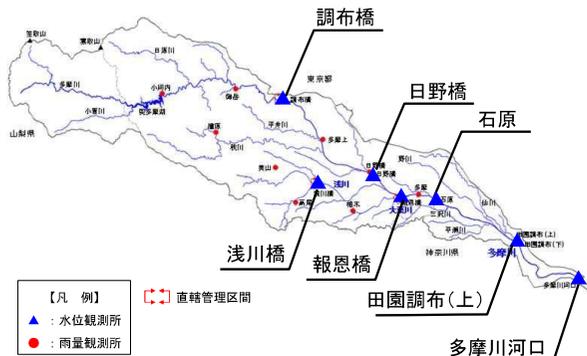
- 令和元年東日本台風(台風19号)では多摩川流域全域にわたり雨が激しく降り、特に上流部では総雨量が600mm以上の非常に強い雨域が集中し、檜原雨量観測所、御岳雨量観測所等においては、観測を開始してから過去最高の雨量を観測しました。



# 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(1)

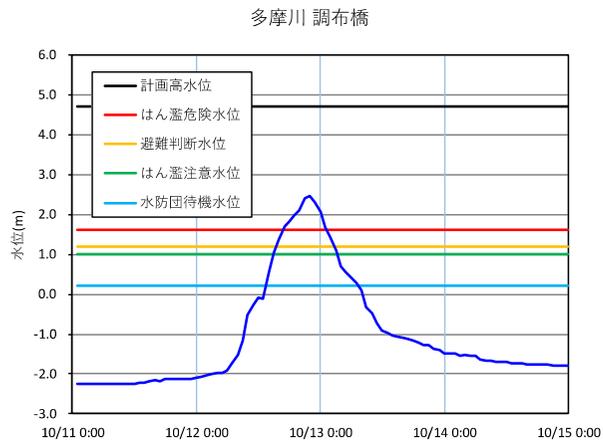
- 令和元年東日本台風(台風第19号)の出水により、多摩川本川下流部の田園調布(上)水位流量観測所、多摩川本川中流部の石原水位流量観測所では計画高水位を超過しました。
- 石原水位流量観測所では、6時間にわたり計画高水位を超過しました。また、石原水位流量観測所では水位計機器の流出により欠測となったため、現地で目視による観測を行いました。

観測所位置図

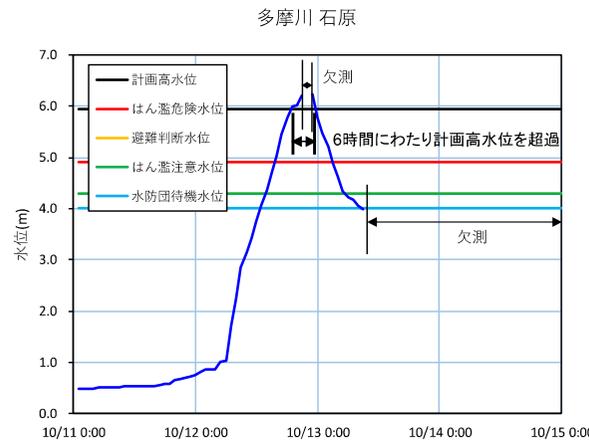


河川	観測所	計画高水位(m)	氾濫危険水位(m)	令和元年東日本台風(台風第19号)における最高水位(m)		過去最高水位(m)		観測開始
				発生日時	水位	発生日時	水位	
多摩川	調布橋	4.70	1.60	2019/10/12 22:00	2.47	1965/09/18 06:00	2.60	1938年
	日野橋	4.71	—	2019/10/12 23:00	4.40	1982/08/02 04:00	3.54	1962年
	石原	5.94	4.90	2019/10/12 23:00	6.24	1982/08/02 4:00	6.12	1932年
	田園調布(上)	10.35	8.40	2019/10/12 23:00	10.77	1974/09/01 19:00	9.07	1928年
	多摩川河口	3.80	—	2019/10/13 4:00	2.64	1971/07/23 14:00	4.15	1964年
浅川	浅川橋	3.58	2.60	2019/10/12 21:00	3.63	2008/8/29 00:00	2.66	1973年
大栗川	報恩橋	3.69	2.50	2019/10/12 21:00	3.05	2008/08/29 03:00	3.28	1968年

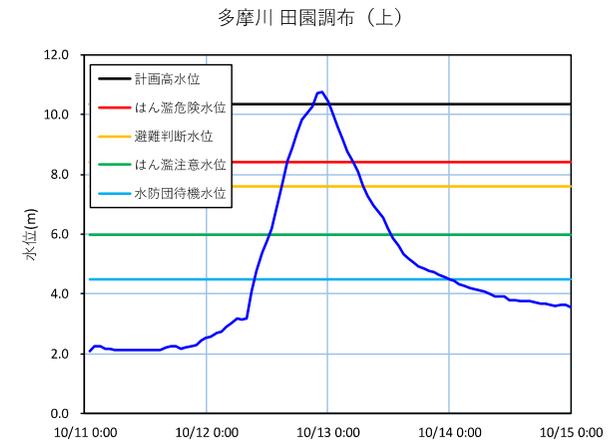
赤字は最高水位を記録したもの 水文水質データベースにより作成



2-5 水文水質データベースにより作成



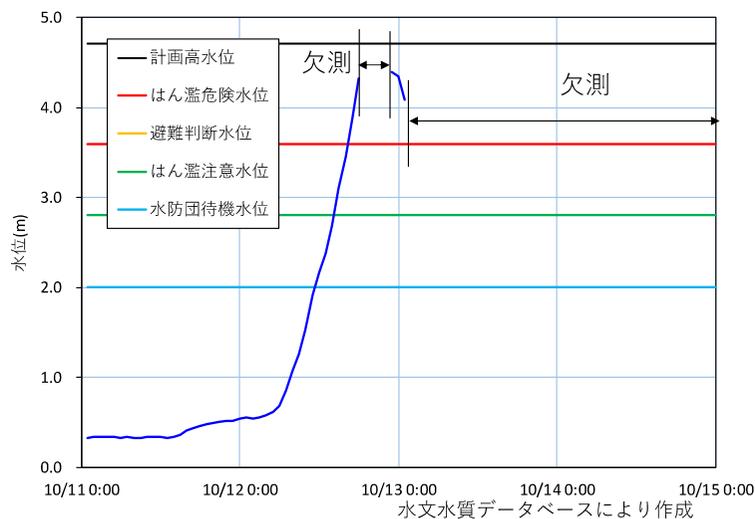
水文水質データベースにより作成 第3回多摩川河川整備計画有識者会議(令和4年10月3日) 資料-3



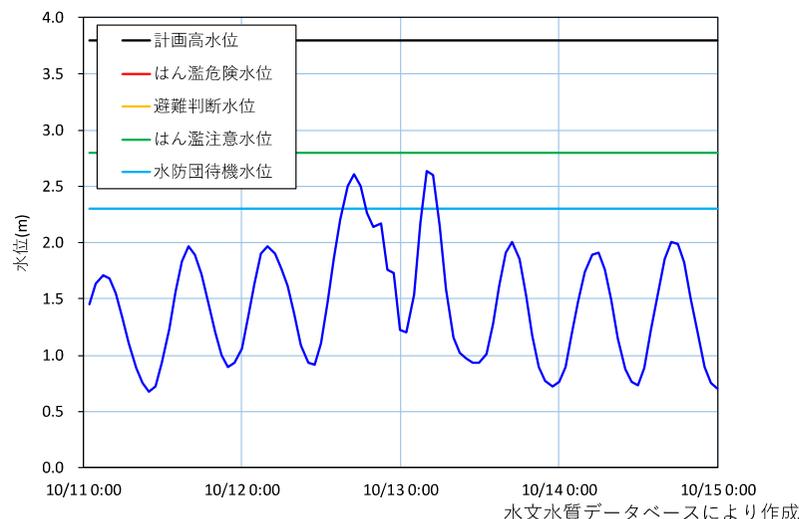
### 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(2)

- 令和元年東日本台風(台風第19号)の出水により、支川浅川の浅川橋水位流量観測所で計画高水位を超過しました。
- 日野橋水位流量観測所では水位計器機の故障により欠測となったため、現地で目視による観測を行いました。

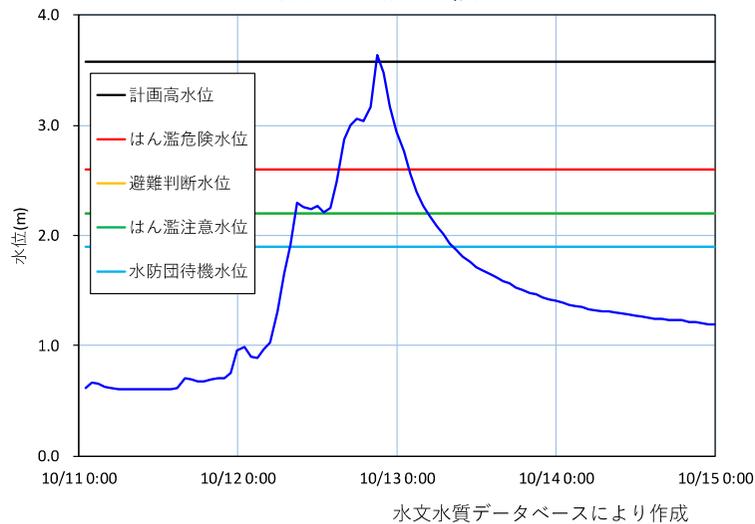
多摩川 日野橋



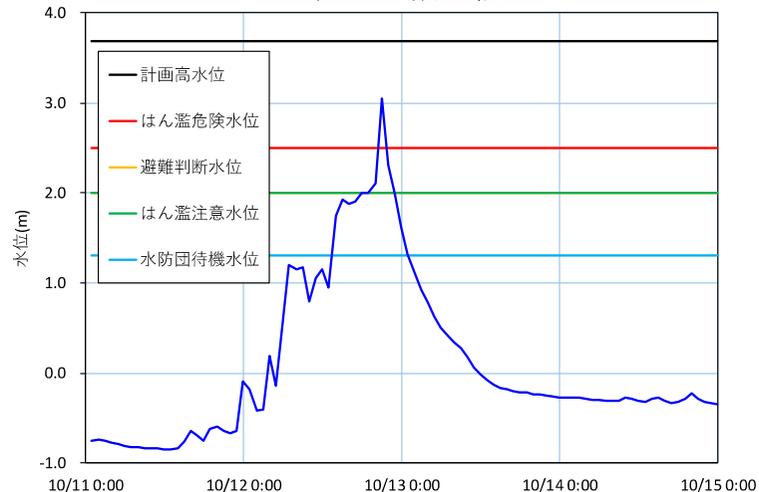
多摩川 多摩川河口



浅川 浅川橋



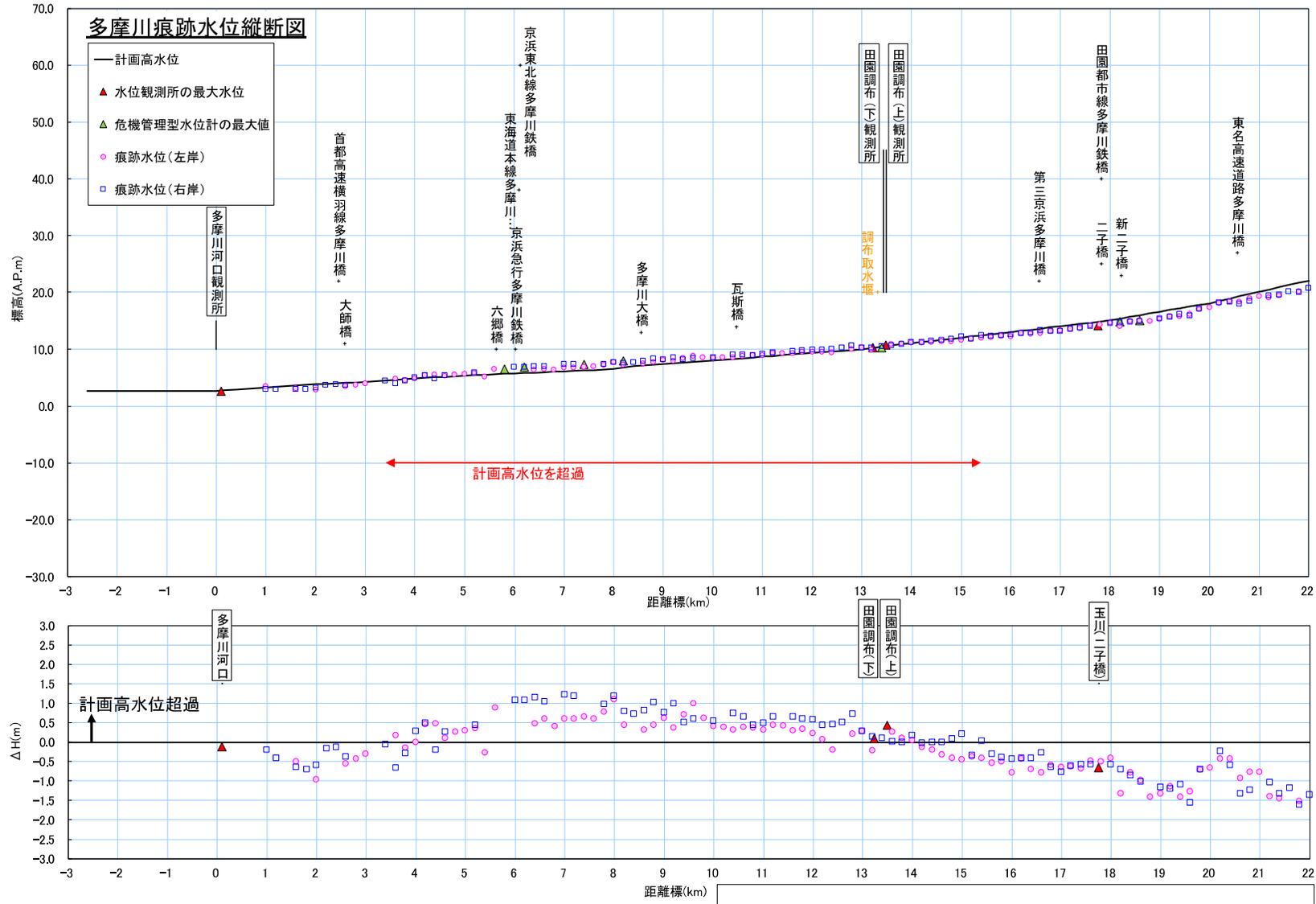
大栗川 報恩橋





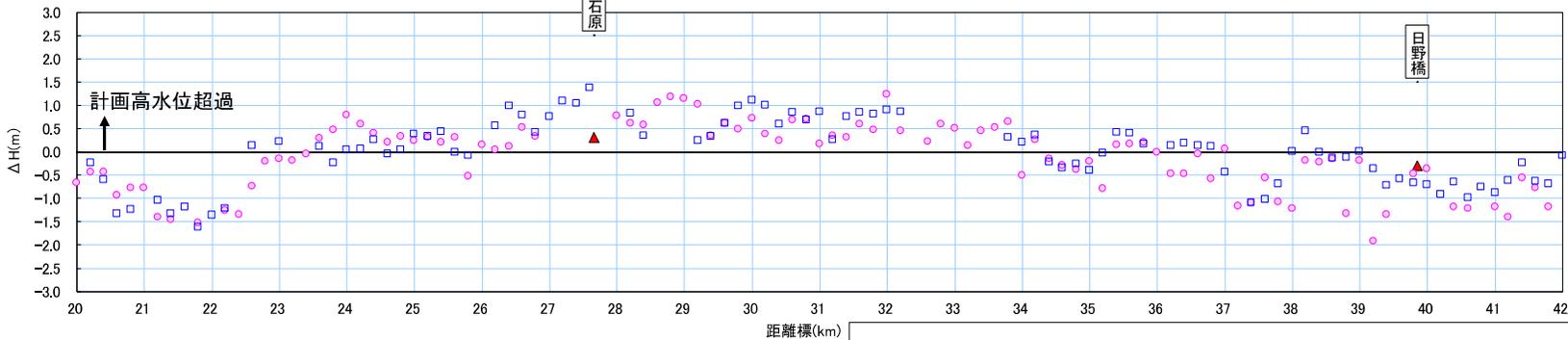
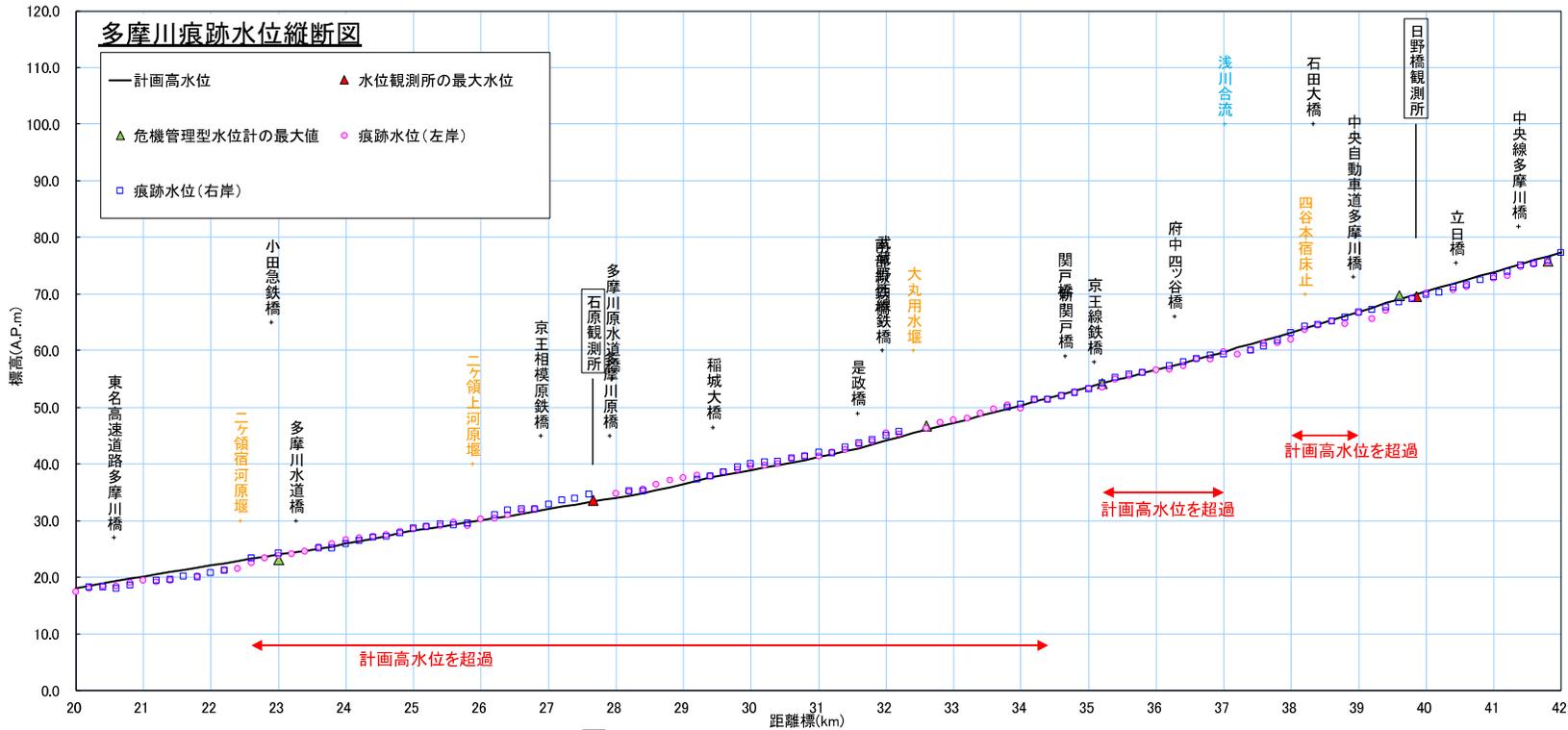
# 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(4)

0.0k~22.0k



# 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(5)

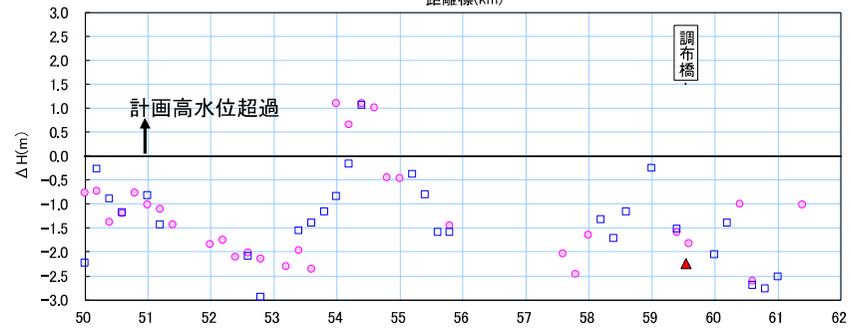
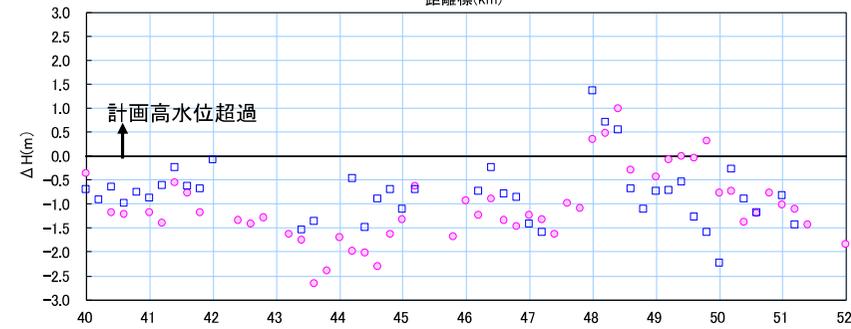
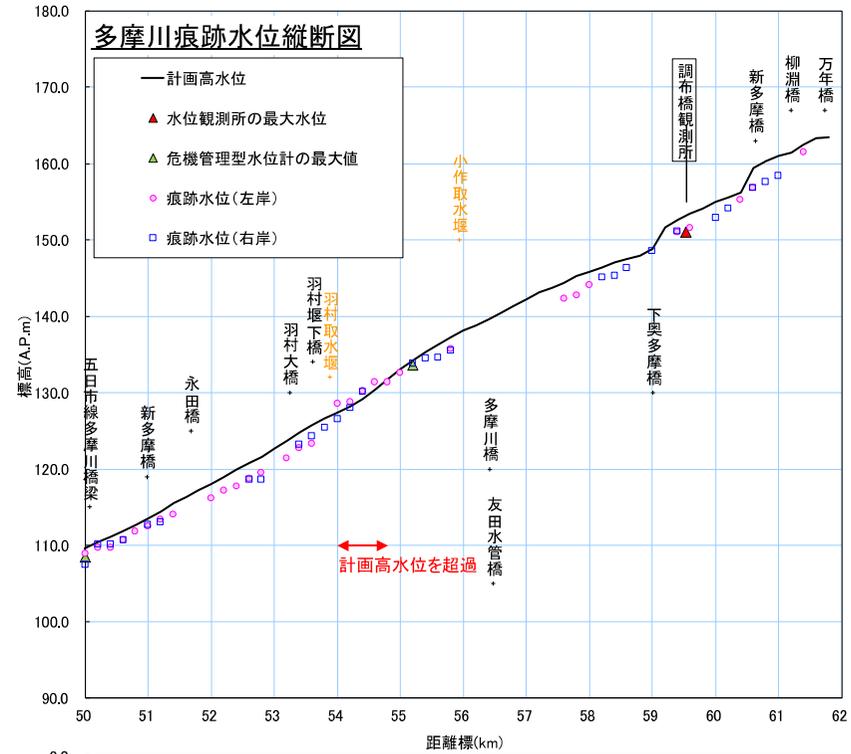
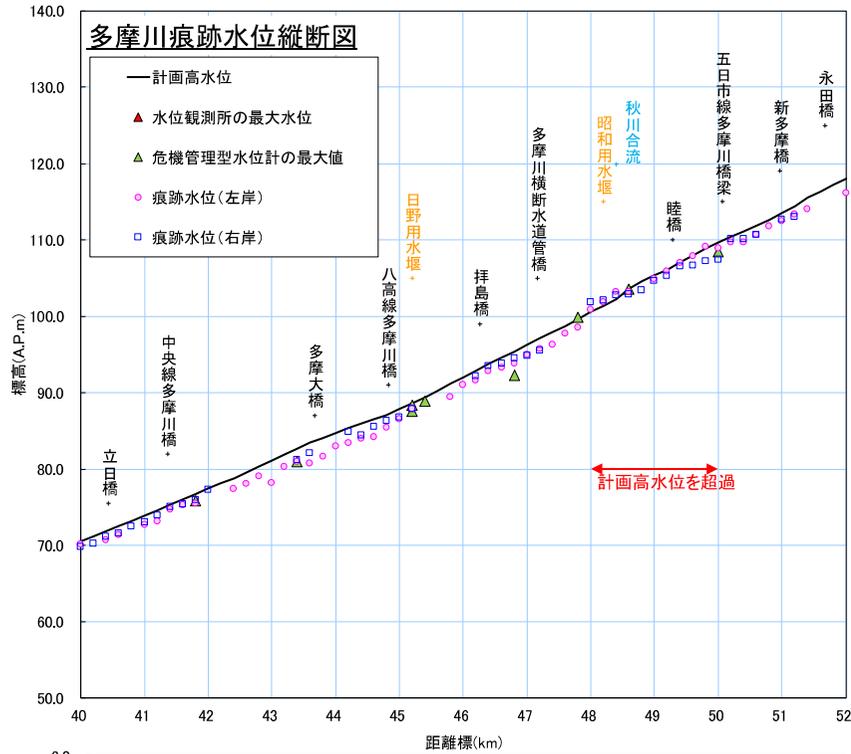
20.0k~42.0k



▲水位観測所ピーク水位-計画高水位 ●左岸:痕跡水位-計画高水位 □右岸:痕跡水位-計画高水位

# 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(6)

40.0k~62.0k



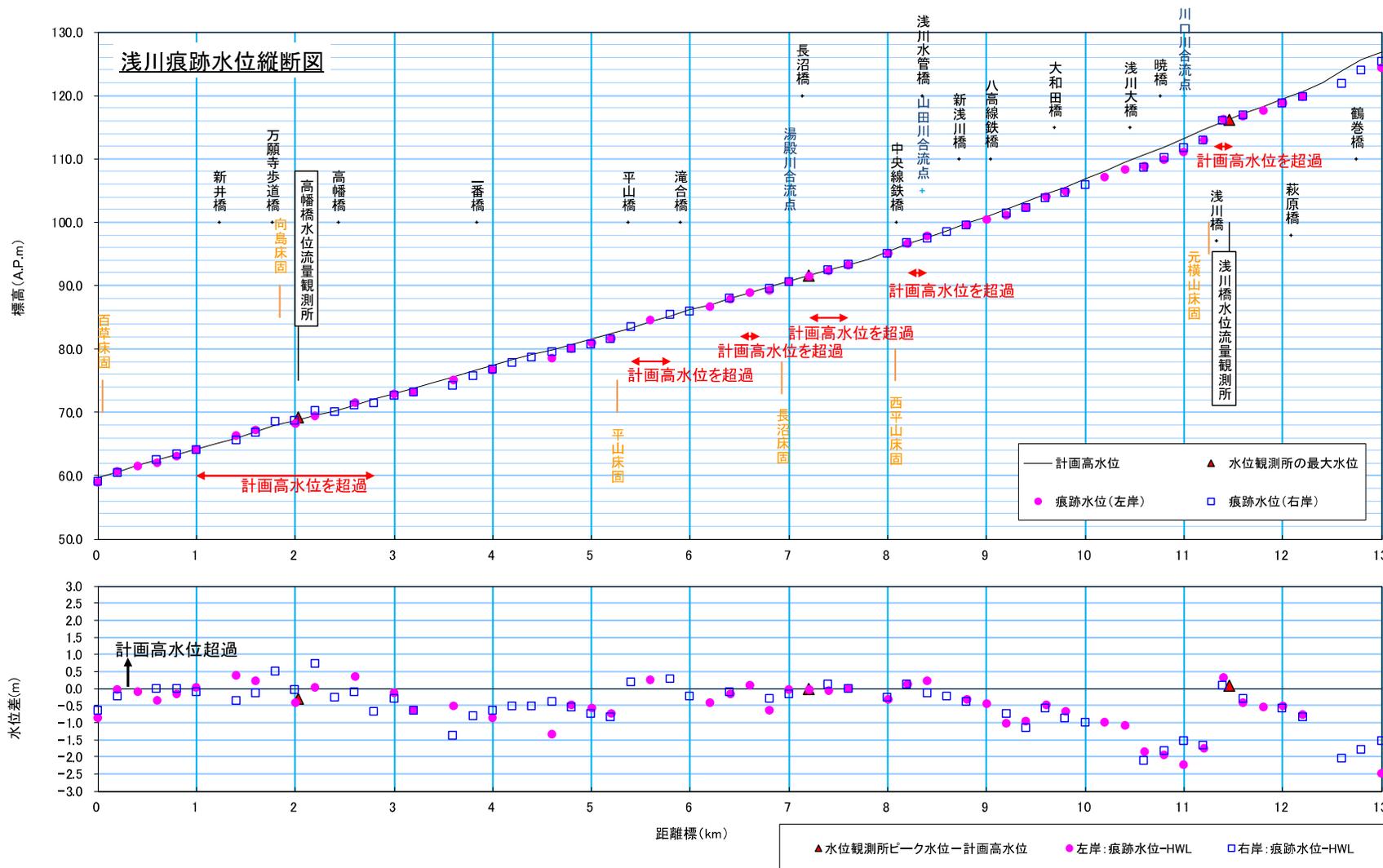
2-10

▲水位観測所ピーク水位-計画高水位 ●左岸:痕跡水位-計画高水位 □右岸:痕跡水位-計画高水位

▲水位観測所ピーク水位-計画高水位 ●左岸:痕跡水位-計画高水位 □右岸:痕跡水位-計画高水位

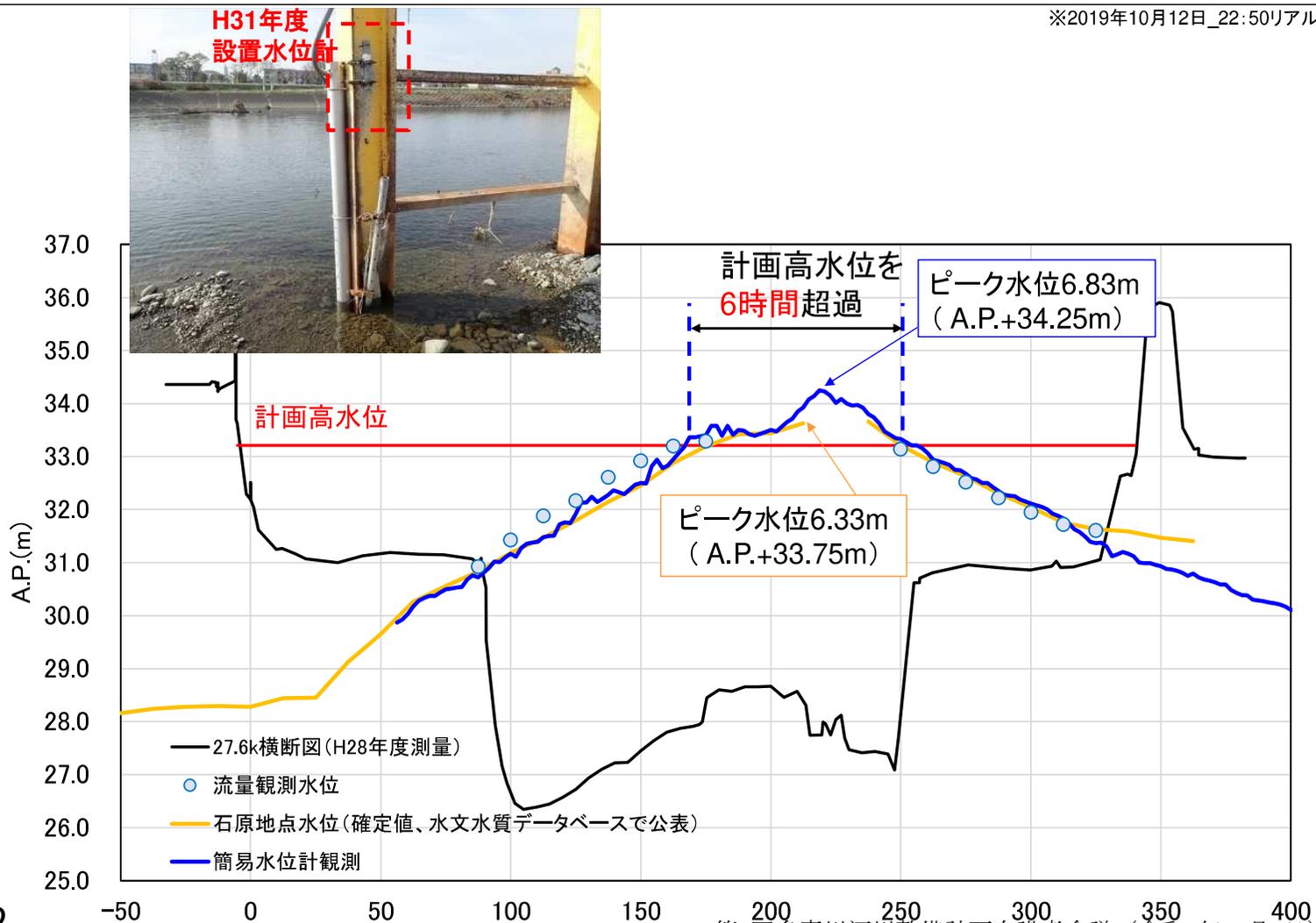
### 3. 令和元年東日本台風(台風第19号) 水位の状況(7)

- 浅川では1k付近～2.8k付近、5.4k付近～5.8k付近、6.6k付近、7.2k付近～7.6k付近、8.2k付近～8.4k付近、11.4k付近で計画高水位を超過しました。



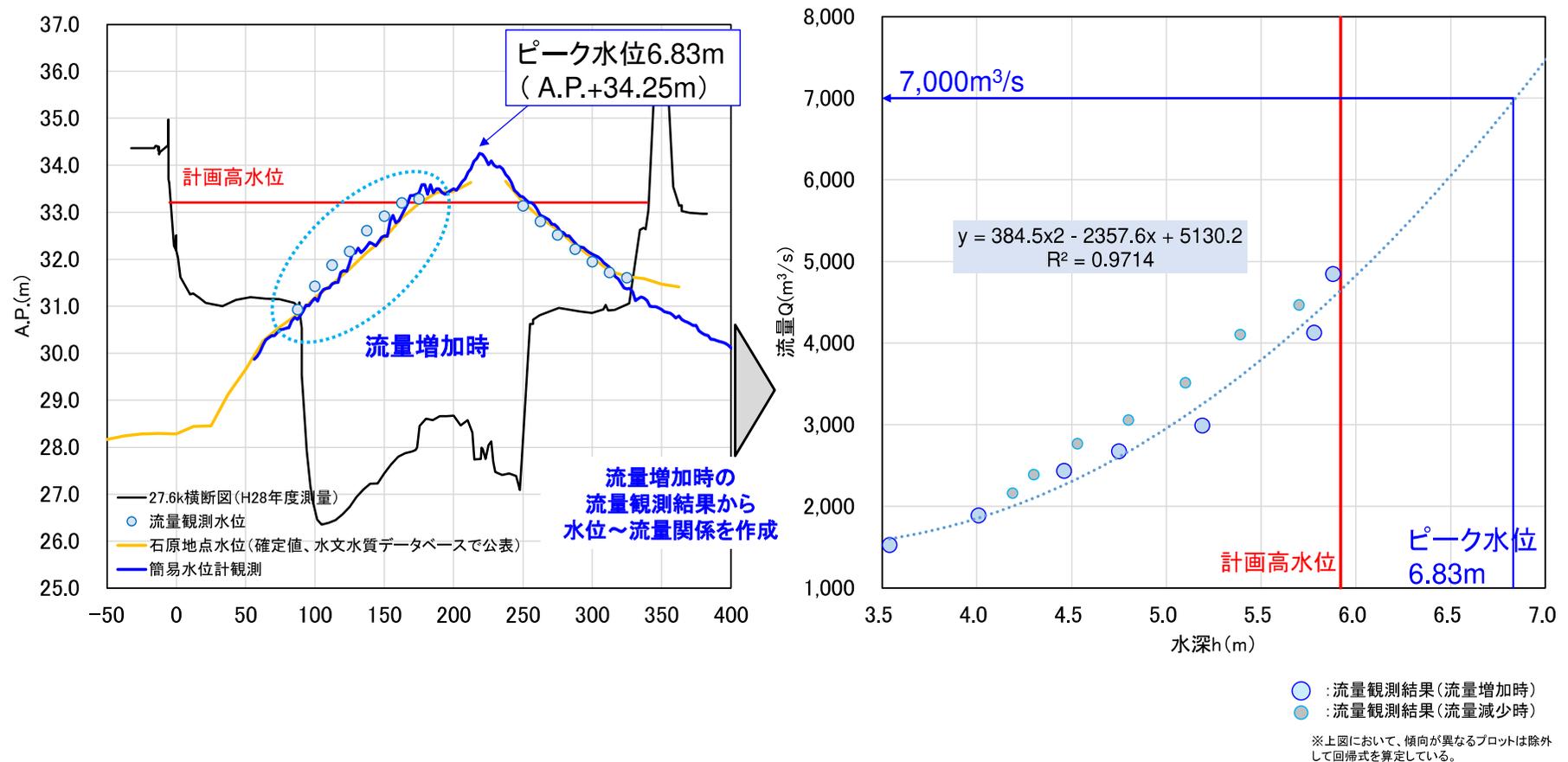
## 4. 令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定(1)

- 第1回多摩川水系河川整備計画有識者会議では、欠測のある石原水位流量観測所の水位を基に、最高水位を6.33m※ (A.P.+33.75m) としていました。
- その後、石原水位流量観測所に予備として設置していた簡易水位計のデータがピーク水位を観測していることが判明し、その水位が6.83m (A.P.+34.25m) (10/12 21:30) であることが確認されました。



## 4. 令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定(2)

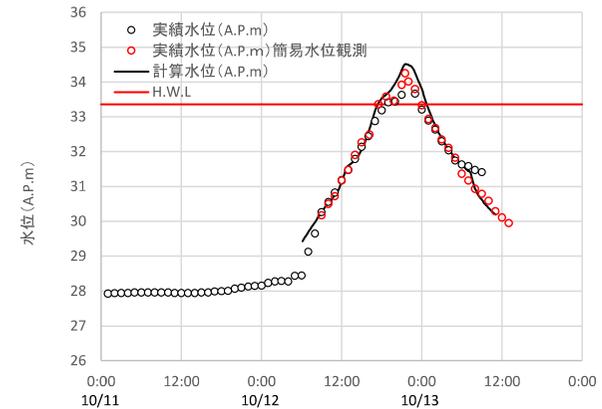
- 洪水時の流量観測結果と簡易水位計のピーク水位から石原地点の通過流量を推定しました。
- 石原水位流量観測所に予備として設置していた簡易水位計のデータがピーク水位6.83m (A.P.+34.25m 10/12 21:30) の水位から石原地点の通過流量を7,000m<sup>3</sup>/sと推定しました。



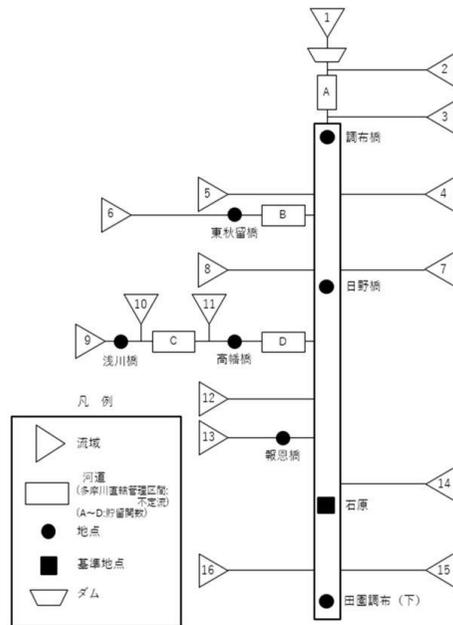
# 4. 令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定(3)

- 水理計算から石原地点の通過流量を推定しました。
- 多摩川(0.0k~61.8k)を対象に一次元不定流計算モデルを構築し、貯留関数で算定した流入量を上流端及び横流入として与え、下流端には多摩川河口観測所の水位を与えて計算を行いました。
- その結果から石原地点の通過流量を7,000m<sup>3</sup>/sと推定しました。

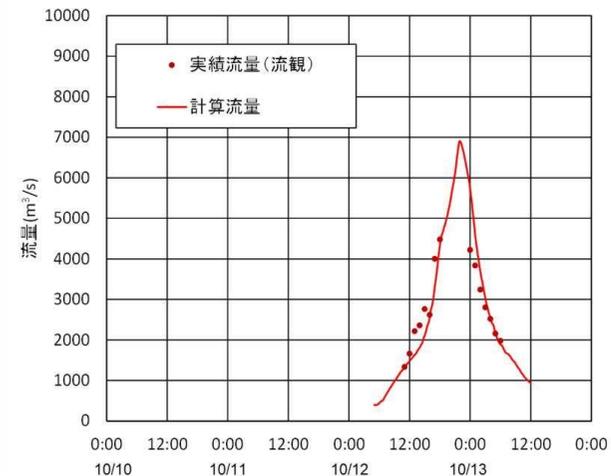
項目	計算条件
計算手法	一次元不定流計算
河道断面	多摩川0.0~61.8k (200mピッチ)
出発水位	多摩川河口水位観測所の実績水位
粗度係数	R1.10洪水を再現する粗度係数をトライアルで設定。
流量	貯留関数モデルによる流出計算結果を上流端及び横流入に設定。なお田園調布より下流は排水機場の地点でポンプ排水量を与えた。貯留関数の計算において、小河内ダムからの実績放流量を適用。



不定流計算結果 水位ハイドロ(石原)



不定流計算モデル図

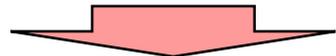


不定流計算結果 流量ハイドロ(石原)

# 【No.7-15補足】令和元年東日本台風（台風第19号）の流量の推定について

ご意見

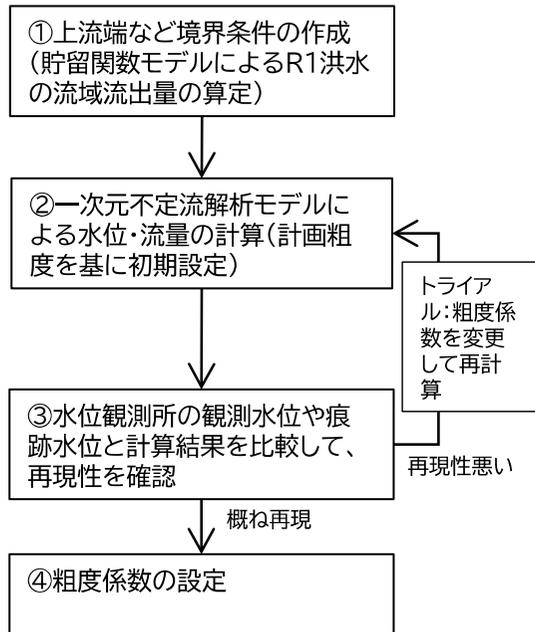
- 不定流モデルによる流量推定の手順を示してほしい
- 粗度係数設定の手順や考え方を整理すること
- 流量推定に用いた不定流計算モデルの粗度係数等の具体的な根拠を示していくことが大事である



考え方

- 不定流モデルの水位が観測所水位や痕跡水位と同程度となるまで、河道の粗度係数をトライアルして設定した。

## ■不定流計算における粗度係数設定の流れ

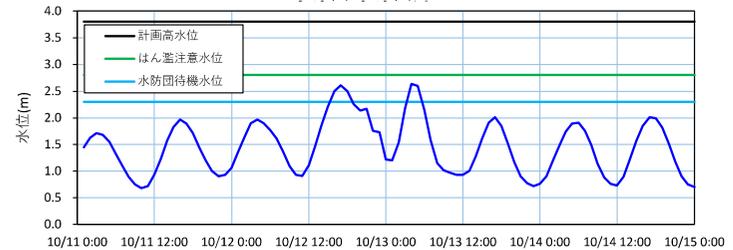
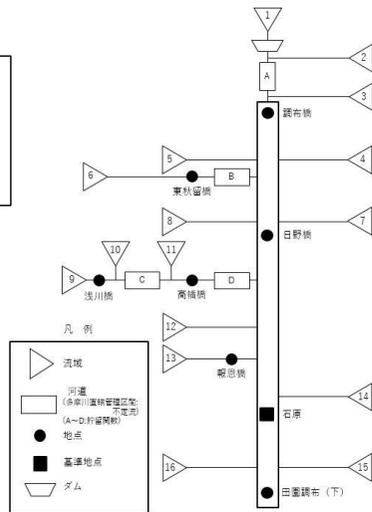


※設定した粗度係数は河道計画で設定している低水路の粗度係数と比較し

2-15

## ■一次元不定流解析の計算条件

項目	計算条件
計算手法	一次元不定流解析(下図参照)
河道断面	多摩川0.0~61.8k (R02.3測量断面、200mピッチ)
出発水位	多摩川河口水位観測所の実績水位(右上図参照)
流量	流出計算(台風19号ダムあり流量)貯留関数モデルによる流出計算結果を上流端及び横流入に設定。なお田園調布より下流は排水機場の地点でポンプ排水量を与えた。 なお、貯留関数の計算において、小内河内ダム地点においてダムの実績放流量を適用した。



不定流解析の下流端水位(多摩川河口観測所)

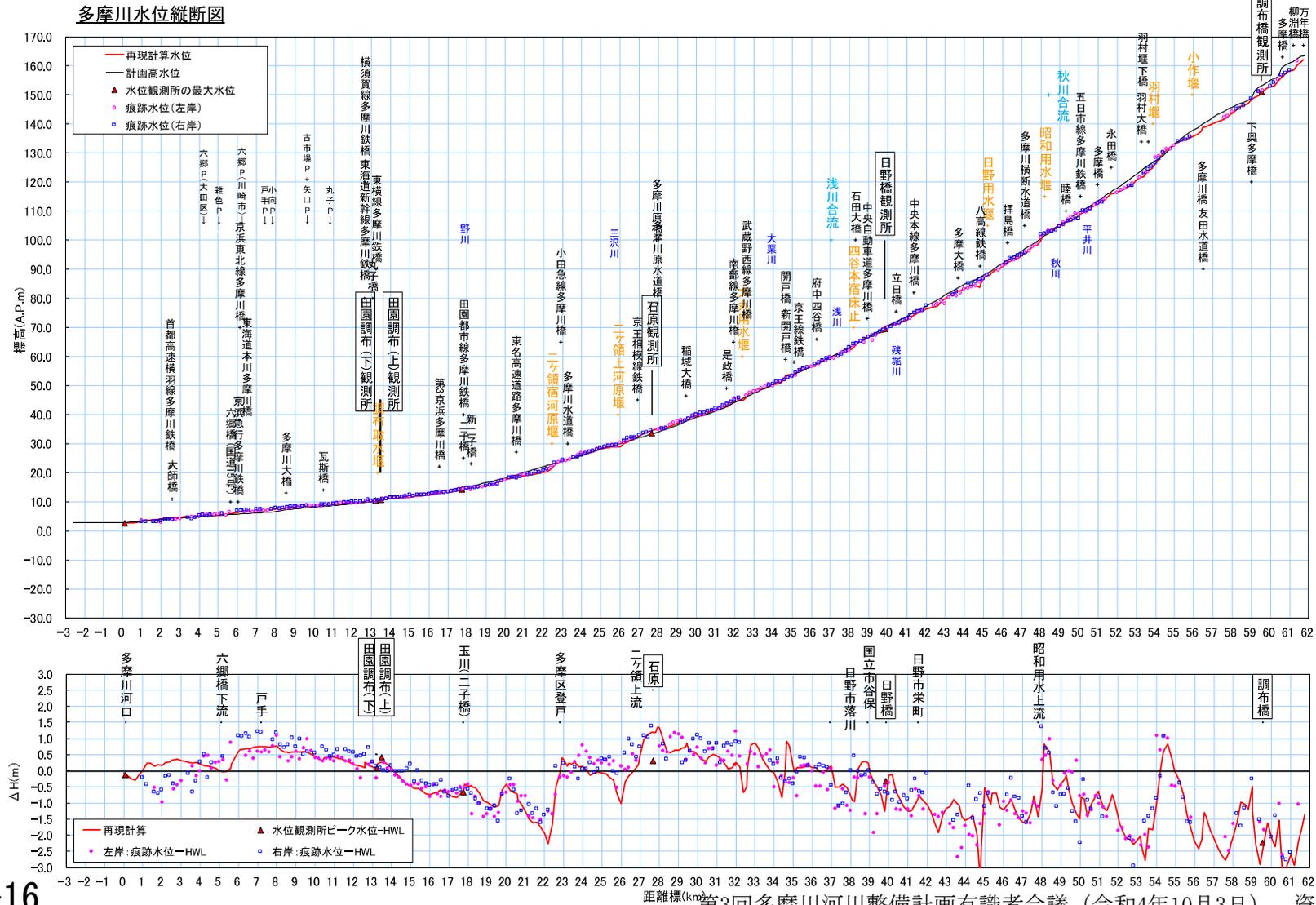
区間	セグメント	設定した粗度係数	(参考)河道計画の低水路粗度係数
0.0k ~ 5.0k	3	0.018	0.018
5.0k ~ 13.3k	2-2	0.025	0.018
13.3k ~ 17.8k	2-1	0.025	0.025
17.8k ~ 22.4k	2-1	0.027	0.025
22.4k ~ 25.8k	2-1	0.028	0.025
25.8k ~ 32.4k	2-1	0.028	0.025
32.4k ~ 35.0k	1	0.030	0.030
35.0k ~ 37.0k	1	0.030	0.030

区間	セグメント	設定した粗度係数	(参考)河道計画の低水路粗度係数
37.0k ~ 38.2k	1	0.030	0.030
38.2k ~ 40.0k	1	0.030	0.030
40.0k ~ 45.2k	1	0.030	0.030
45.2k ~ 47.8k	1	0.030	0.030
47.8k ~ 53.8k	1	0.030	0.030
53.8k ~ 55.8k	1	0.030	0.030
55.8k ~ 61.8k	1	0.030	0.030

一次元不定流計算モデルのイメージ図 第5回多摩川河川整備計画有識者会議(令和7年11月17日) 資料3-2

# 4. 令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定(4)

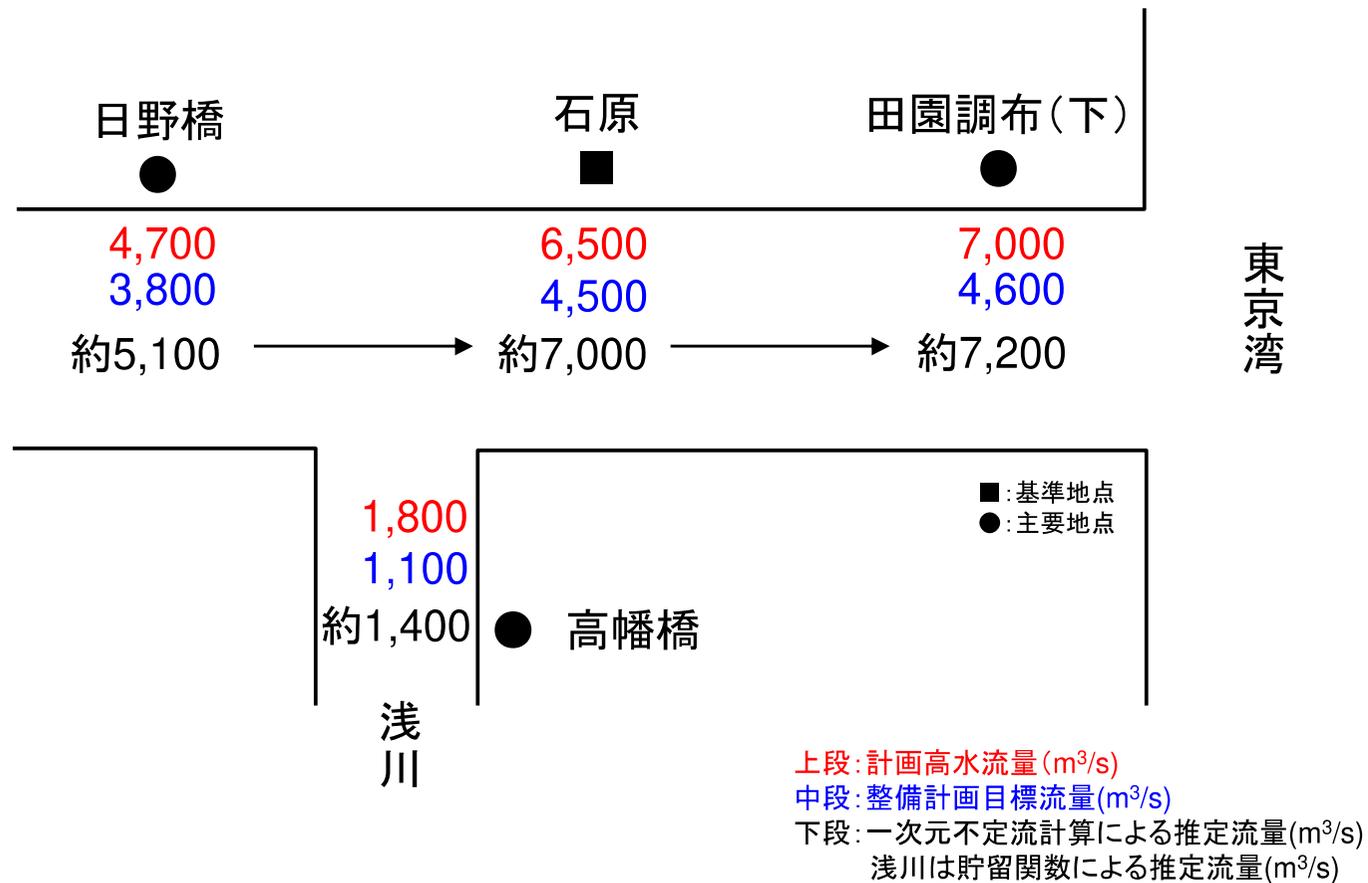
- 令和元年東日本台風(台風第19号)の不定流計算を実施し、ピーク水位と痕跡水位を概ね再現する結果を得ました。



## 4. 令和元年東日本台風(台風19号)における流量規模の推定(5)

- 観測された水文データと河道条件・河川管理施設の稼働状況などから多摩川を流下した流量の推定を実施しました。
- その結果、令和元年東日本台風(台風第19号)は、現行の計画高水流量を超過した洪水であったと推定しました。

流量配分図



流量の推定にあたっては、不定流計算を用いて、令和元年東日本台風後の河道条件等により推定したものです。

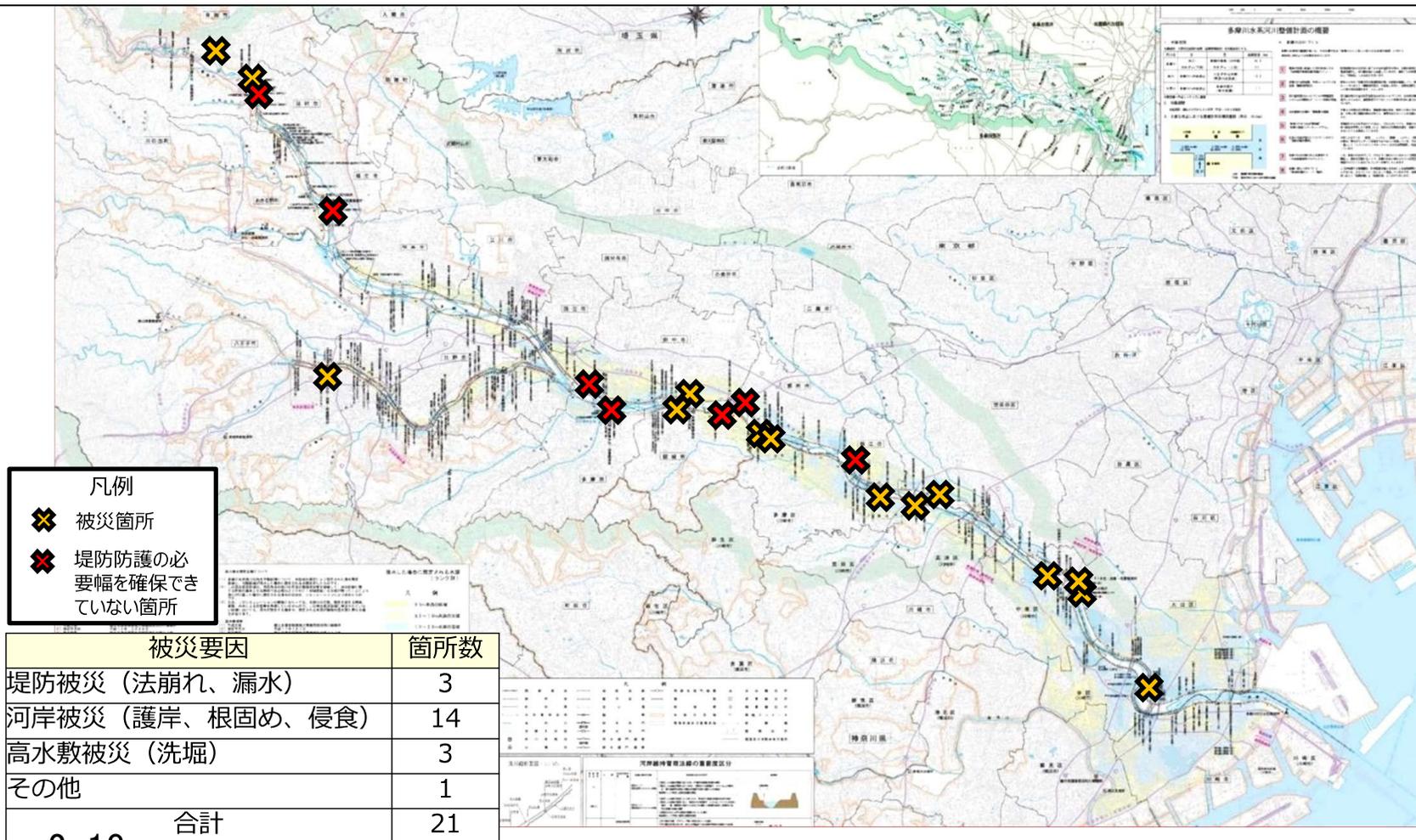
※流量観測については、避難指示等によりピーク流量を観測することが困難な状況であった。

第3回多摩川河川整備計画有識者会議 (令和4年10月3日)

# (1)令和元年東日本台風による洪水の被災 ①河川の被害概要

## 河川堤防や河岸等の被害概要

- 多摩川・浅川では21箇所において堤防や河岸等の被災が発生した。
- このうち、河岸被災（護岸、根固め、侵食）や高水敷被災（洗堀）といった被災は17箇所に上がる。
- 河岸被災（護岸、根固め、侵食）や高水敷被災（洗堀）の生じた17箇所のうち、**7箇所では堤防防護の必要幅(40m)を確保できていない箇所の被災**であり、侵食が堤防まで拡大すれば破堤によって家屋浸水など重要な被害が発生する恐れがあった。



# (1)令和元年東日本台風による洪水の被災 ②河川の被害特性

多摩川水系

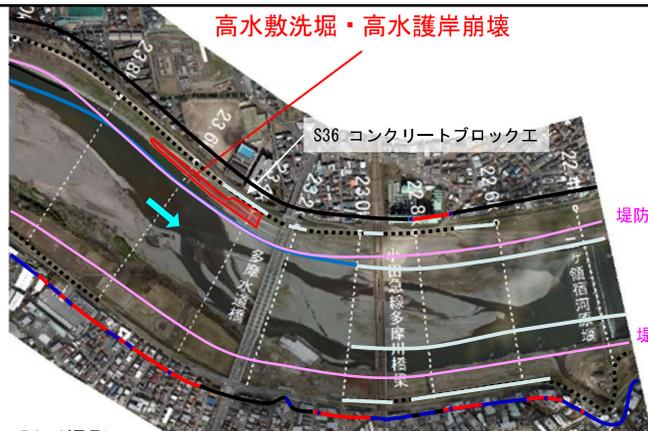
■ 河岸被災（護岸、根固め、侵食）や高水敷被災（洗堀）の生じた17箇所のうち、**7箇所では堤防防護の必要幅(40m)を確保できていない箇所の被災**であり、侵食が堤防まで拡大すれば破堤によって家屋浸水など重要な被害が発生する恐れがあった。

被災箇所番号	地先名	測点	延長	被災内容	痕跡水位(水深)	護岸設置時期	構造物に関する要因		河道線形上の要因						
							護岸の老朽化又は強度不足	構造物周り	湾曲による水衝	低水路の張り出し	川幅の急拡大・急縮	砂州の固定化	砂州と湾筋の移動		
①	東京都大田区西六郷四丁目	左岸 7.6k-85m~7.6k+128m	213m	低水護岸崩壊	HWL超過(2.8m)	H12以前	○		○						
②	東京都大田区田園調布南	左岸 12.6k-30m~12.6k+27m	57m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL超過(5.3m)	H12以前	○	○	○						
③	東京都大田区田園調布本町	左岸 12.8k-65m~12.8k+5m	70m	漏水	HWL超過	-									
④	神奈川県川崎市中原区上丸子天神町	右岸 13.6k-44m~13.6k+128m	172m	低水護岸崩壊	HWL超過(6.2m)	H12以前	○		○						
⑤	東京都世田谷区宇奈根一丁目	左岸 19.4k-87m~19.4k+4m	91m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL以下(3.4m)	H12以前	○		○	○					
⑥	神奈川県川崎市高津区宇奈根	右岸 20.0k-23m~20.0k+16m	39m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL以下(3.5m)	H12以前	○		○						
⑦	神奈川県川崎市多摩区宿河原七丁目	右岸 21.0k+123m~21.4k-51m	226m	河岸侵食	HWL以下(3.4m)	-									○
⑧	東京都狛江市元和泉三丁目	左岸 23.4k-66m~23.6k+94m	360m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL超過(4.2m)	H12以前	○		○						○
⑨	神奈川県川崎市多摩区菅野戸呂	右岸 27.0k+84m~27.0k+187m	103m	堤防法崩れ	HWL超過(2.9m)	-						○			
⑩	東京都調布市多摩川三丁目	左右岸 27.6k+84m	一式	水位計流失	HWL超過	-									
⑪	東京都調布市上石原三丁目~東京都府中市押立町四丁目	左岸 28.6k+35m~28.6k+197m	162m	水制工流出	HWL超過(4.8m)	H13以降(水制が被災)			○					○	
⑫	東京都稲城市押立	右岸 29.2k-70m~29.2k+70m	140m	河岸侵食	HWL超過(1.8m)	-			○						
⑬	東京都府中市小柳町六丁目	左岸 30.6k+39m~30.6k+159m	120m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL超過(3.0m)	H12以前	○		○					○	
⑭	東京都稲城市大丸	右岸 31.0k-48m~31.4k-94m	256m	河岸侵食	HWL超過(3.0m)	-			○						
⑮	東京都多摩市関戸	右岸 34.4k-19m~34.4k+101m	120m	高水敷洗掘	HWL以下(2.0m)	H13以降(護岸の被災無)									○
⑯	東京都府中市住吉町五丁目	左岸 35.0k+0m~35.0k+40m	40m	高水敷洗掘	HWL以下(2.5m)	H13以降(護岸の被災無)		○							○
⑰	東京都福生市大字熊川	左岸 49.6k-23m~49.6k+90m	123m	高水敷洗掘	HWL以下(2.5m)	H13以降(護岸の被災無)			○						
⑱	東京都羽村市玉川一丁目	左岸 53.2k+15m~53.2k+91m	76m	低水護岸崩壊	HWL以下(2.8m)	H12以前	○	○							
⑲	東京都羽村市羽西二丁目	左岸 55.6k-114m~55.6k-72m	42m	低水護岸崩壊	HWL以下(1.5m)	H12以前	○								○
⑳	東京都青梅市河辺町三丁目	左岸 58.2k+58m~58.2k+76m	18m	根固ブロック流出	HWL以下(3.1m)	H13以降(根固が被災)			○						
㉑	東京都八王子市中野上町一丁目	左岸 浅川11.4k-68m~11.4k+0m	68m	低水護岸崩壊 高水敷洗掘	HWL超過(1.1m)	H13以降(擦付部が被災)		○			○				

堤防防護の必要幅を確保できていない箇所

## (2)被災箇所状況 ⑧狛江市元和泉三丁目

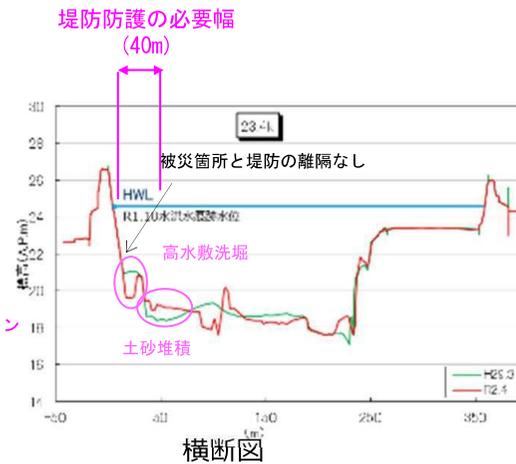
- 左岸23.4k-66m～23.6k+94m：高水敷洗堀及び高水護岸崩壊
- 被災箇所において、堤防・低水護岸は完成されているが、高水護岸に関しては一部未整備である。また、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所となっている。
- 堤防法尻付近において高水敷洗堀及び高水護岸崩壊が発生し、下流には多摩水道橋があることから、被災が拡大すれば橋の損壊による交通途絶など重大な被害が発生する恐れがあった。



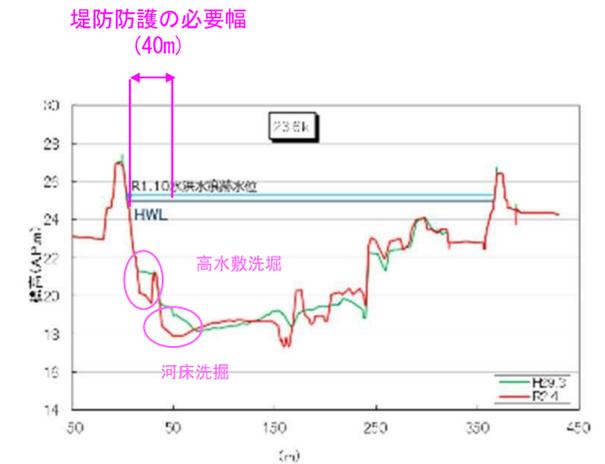
R2.4撮影

- |         |                        |
|---------|------------------------|
| — 計画断面  | ⋯ 整備計画残メニュー            |
| — 暫定堤   | — 整備済み高水護岸 (H13～H30完成) |
| — カミソリ堤 | — 整備済み低水護岸 (H13～H30完成) |
|         | — 既設護岸 (～H12完成)        |

被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況



横断面



横断面



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)

2-20



被災状況 (高水敷洗堀)

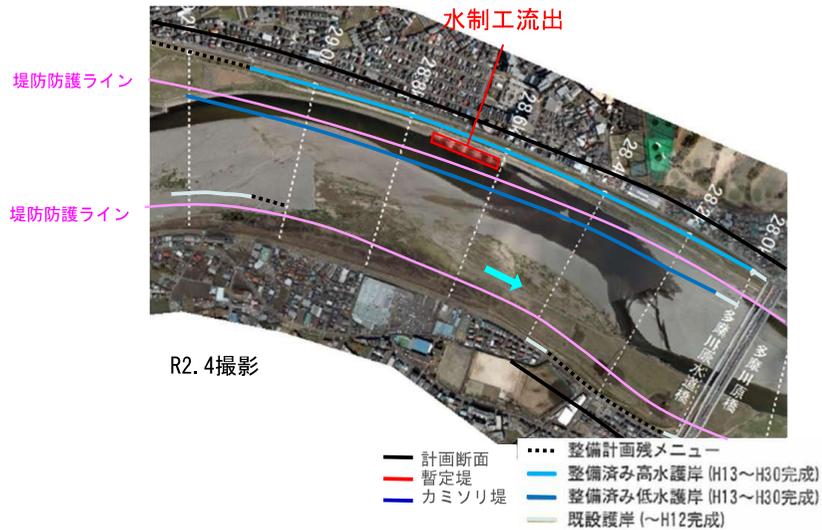


被災状況 (高水護岸崩壊)

## (2)被災箇所状況 ⑪調布市上石原三丁目～府中市押立町四丁目

多摩川水系

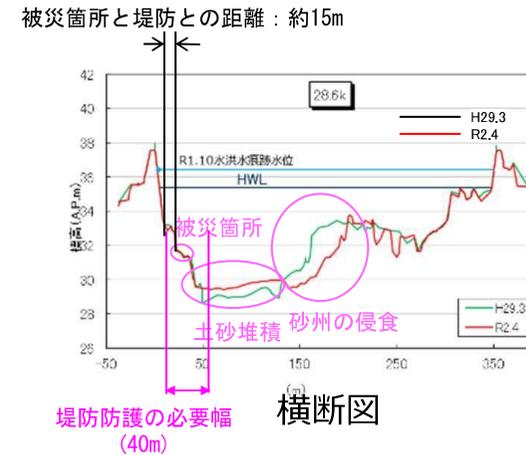
- 左岸28.6k+35m～28.6k+197m：水制工流出
- 被災箇所において、堤防・高水護岸・低水護岸は完成しているが、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所である。
- 被災箇所と堤防の距離は15mと短く、痕跡水位はHWLを超過しており、被災が堤防まで拡大すれば破堤による家屋浸水など重大な被害が発生する恐れがあった。



被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況



被災状況（水制工流出）

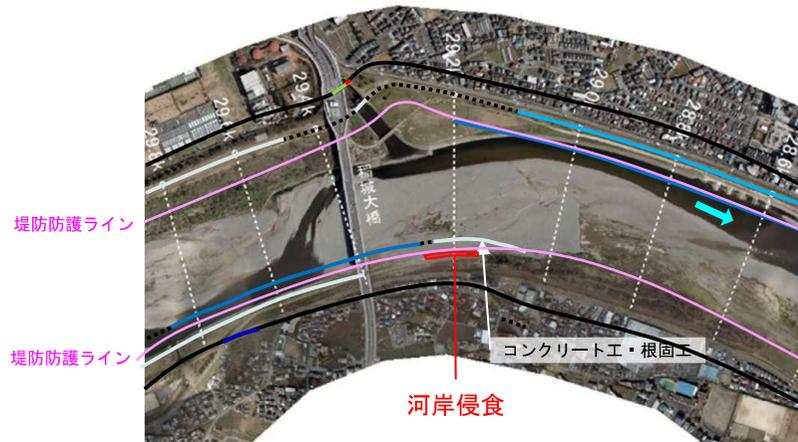


被災状況（水制工流出）

## (2)被災箇所の状況 ⑫調布市上石原三丁目～稲城市押立

多摩川水系

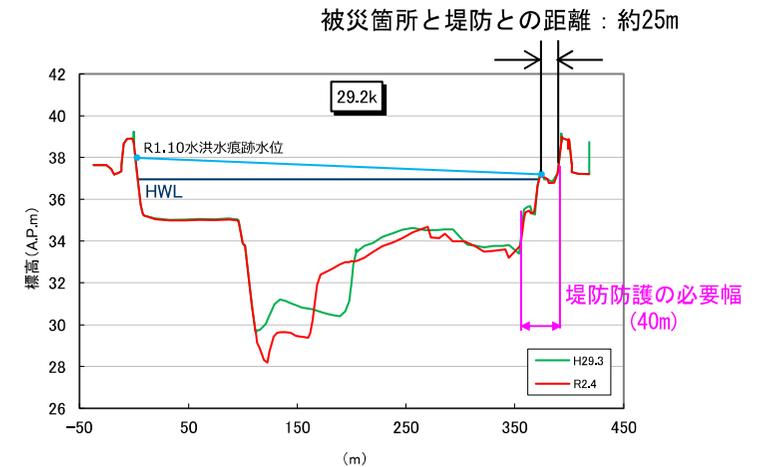
- 右岸29.2k-70m～29.2k+70m：河岸侵食
- 堤防は整備済みであり、低水護岸にはコンクリートブロック工及び根固め工が整備されているが、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所である。



R2.4撮影

- 計画断面
- 暫定堤
- カミソリ堤
- 暫々定
- .... 整備計画残メニュー
- 整備済み高水護岸 (H13～H30完成)
- 整備済み低水護岸 (H13～H30完成)
- 既設護岸 (~H12完成)

被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況



横断面図



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)

2-22

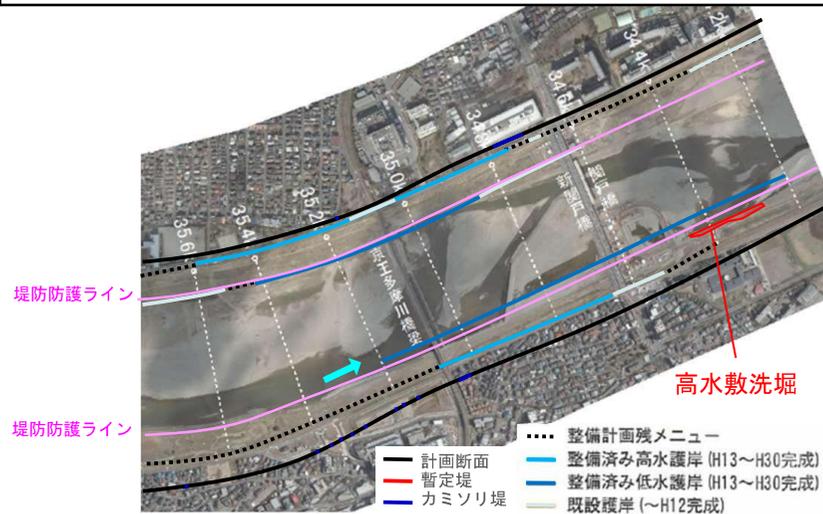


被災状況 (河岸侵食)

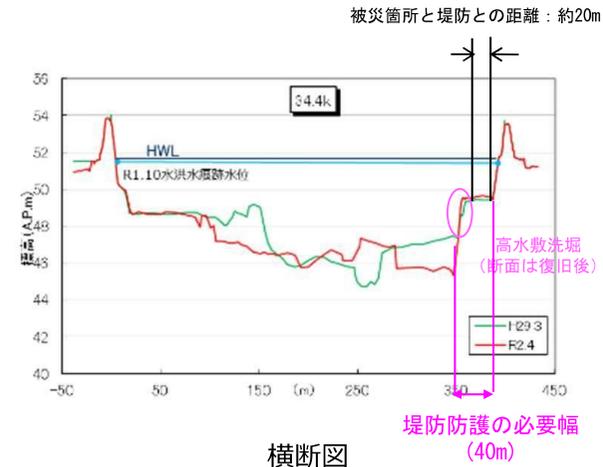
## (2)被災箇所状況 ⑮東京都多摩市関戸

多摩川水系

- 右岸34.4k-19m～34.4k+101m：高水敷洗堀
- 被災箇所において、堤防・低水護岸は完成しており、高水護岸は一部未整備であり、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所である。
- 被災箇所と堤防の距離は20mと短く、被災が拡大すれば破堤による家屋浸水など重大な被害が発生する恐れがあった。



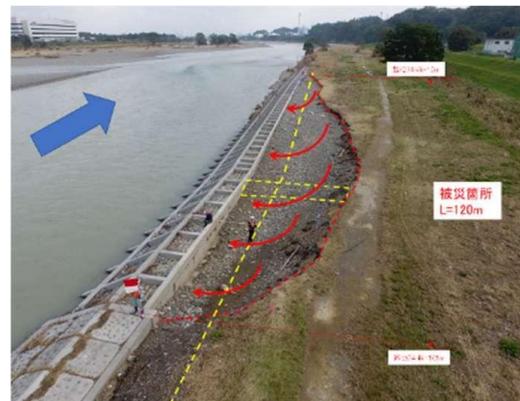
R2. 4撮影 被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況



横断面図



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)



被災状況 (高水敷洗堀)

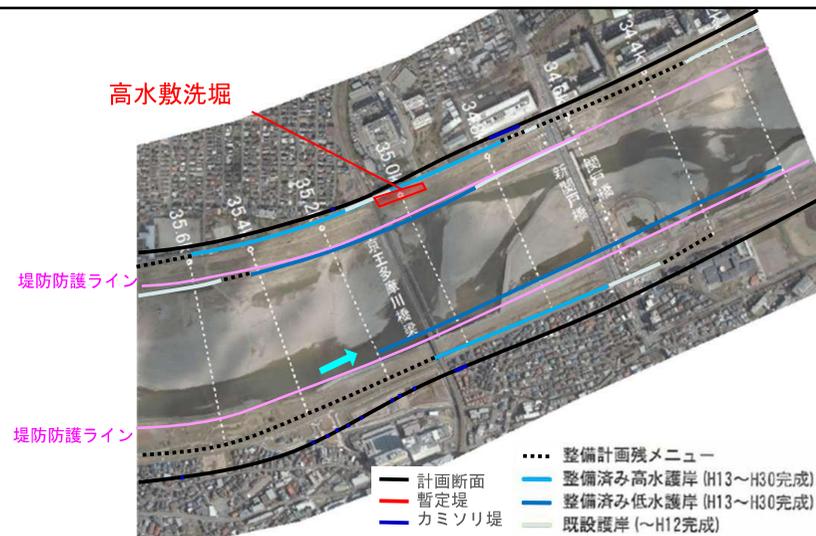


被災状況 (高水敷洗堀)

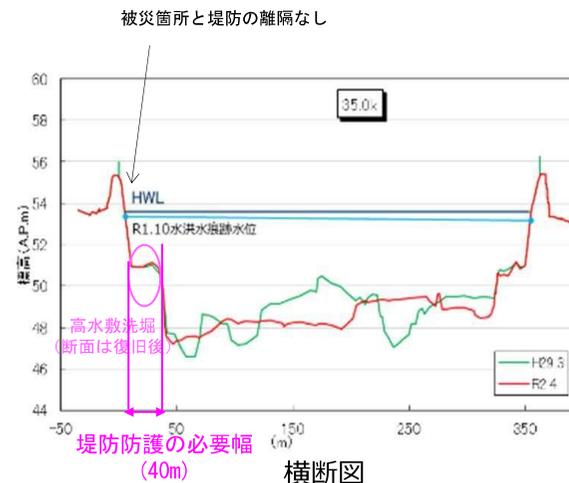
## (2)被災箇所状況 ⑬府中市住吉町五丁目

多摩川水系

- 左岸35.0k+0m～35.0k+40m：高水敷洗堀
- 被災箇所において、堤防・低水護岸・高水護岸は完成している。堤防防護の必要幅（40m）は確保されているが、洪水流が高水敷に乗り上げ堤防法尻付近において高水敷洗堀が発生し、直上流には京王多摩川橋梁があることから、被災が拡大すれば橋の損壊による交通途絶など重大な被害が発生する恐れがあった。



R2.4撮影 被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況

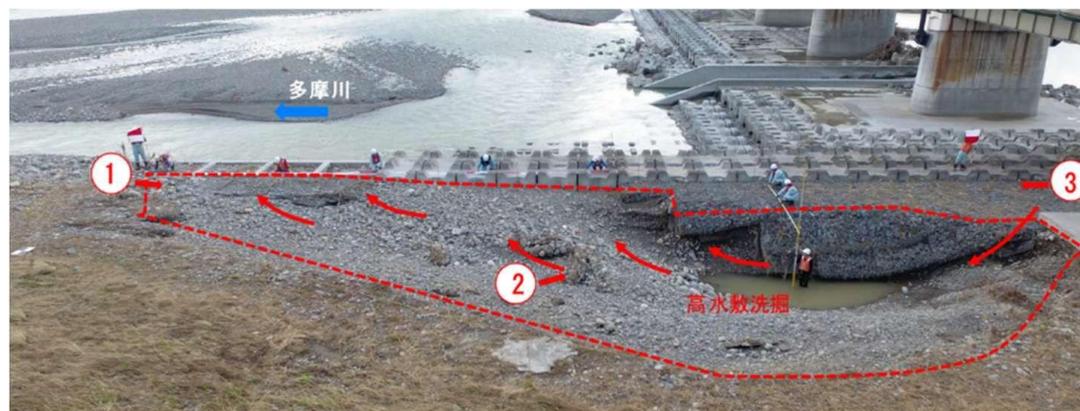


横断面図



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)

2-24



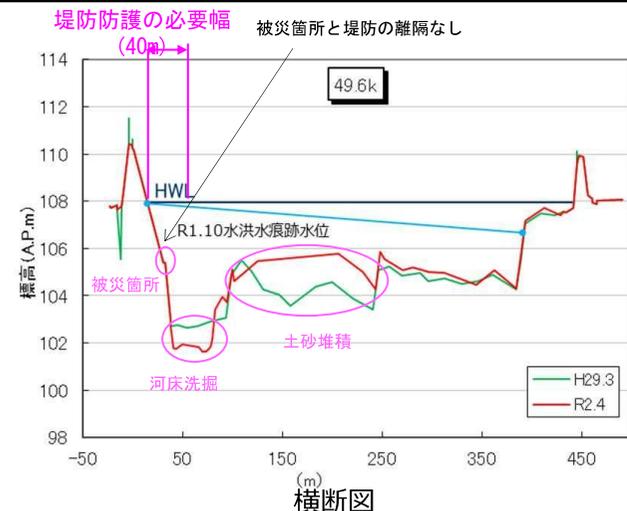
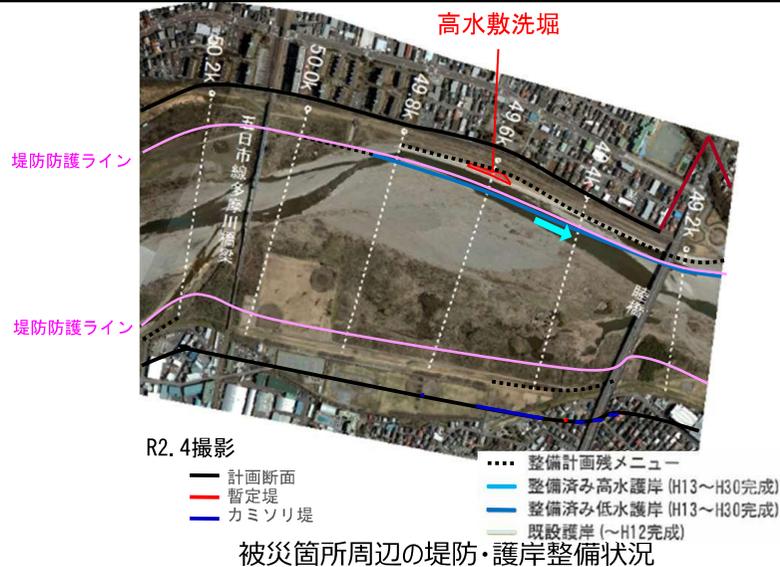
被災状況 (高水敷洗堀)

第7回多摩川河川整備計画有識者会議(令和7年5月20日) 資料-4

## (2)被災箇所状況 ⑰福生市大字熊川

多摩川水系

- 左岸49.6k-23m～49.6k+90m：高水敷洗堀
- 被災箇所において、堤防・低水護岸は完成されているが、高水護岸は未整備であり、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所である。
- 堤防法尻付近において高水敷洗堀が発生し、被災が拡大すれば破堤による家屋浸水など重大な被害が発生する恐れがあった。



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)  
 2-25



被災状況 (高水敷洗堀)

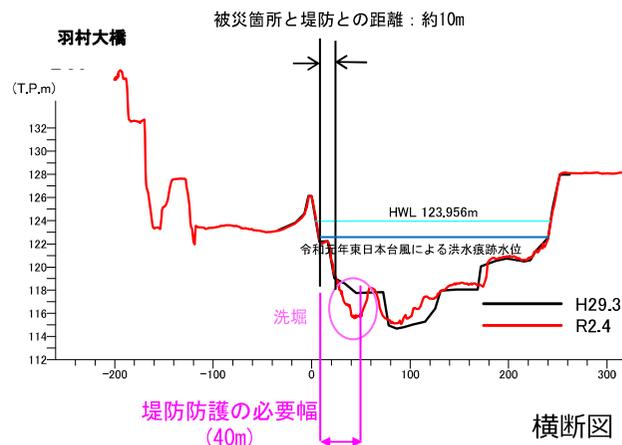
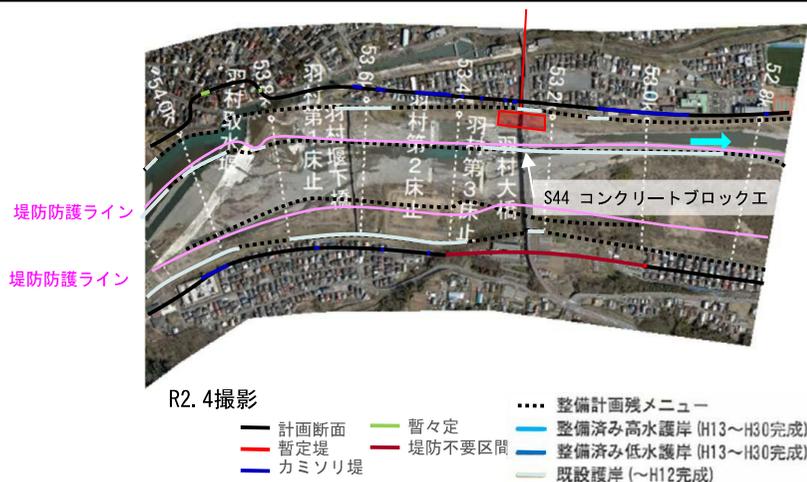


被災状況 (かごマット捲れ)

## (2)被災箇所状況 ⑱羽村市玉川一丁目

多摩川水系

- 左岸53.2k+15m～53.2k+91m：低水護岸崩壊
- 被災箇所において、堤防・低水護岸は完成されているが、高水護岸は一部未整備であり、堤防防護の必要幅（40m）が確保されていない箇所である。
- 堤防法尻から10mに地点において低水護岸崩壊が発生し、羽村大橋があることから、被災が拡大すれば橋の損壊による交通途絶など重大な被害が発生する恐れがあった。



被災箇所周辺の堤防・護岸整備状況



出水時斜め写真 (R1.10.13撮影)



被災状況 (低水護岸崩壊)

# 令和元年東日本台風の 出水に伴う環境変化

## 出水影響調査のまとめ

●業務目的

令和元年東日本台風(台風第19号)により、甚大な被害が発生した多摩川において、その後の河川環境の変遷を把握するためのモニタリングを実施した。

●調査対象項目

調査対象項目

地区名	調査内容	回数	内容	摘要欄	
7地区 <small>注)</small>	生物環境調査	魚類相調査	1回 (春季)	投網、たも網等による採捕調査により出現種を記録	
		底生動物相調査	1回 (初春季)	Dフレームネット等による採捕調査により出現種を記録	
		植物相調査	1回 (秋季)	植物出現リストの作成、重要種・礫河原固有種・外来種の確認位置図の作成	
		植生図作成調査	1回 (秋季)	判読粗図及び判読キーをもとに、現地確認により植生図を作成	
		植生断面調査	1回 (秋季)	横断側線上に出現した植物種を記録し、植生断面図を作成	河川水辺の国勢調査の総合調査地区(太子橋、大丸用水堰、昭和用水堰)の3地区
		鳥類相調査	1回 (秋の渡り)	スポットセンサス法により出現種を記録	大師橋を除く6地区
			1回 (越冬期)		大師橋のみ
		両生類・爬虫類・哺乳類相調査	1回 (夏季)	目撃法、捕獲法、フィールドサイン法等により出現種を記録	
陸上昆虫類相調査	1回 (夏季)	任意採集法等により出現種を記録			

注) 7地区：大師橋、多摩川大橋、宿河原堰、大丸用水堰、昭和用水堰、永田橋、万年橋



- 出水後の植物群落の変化をみると、翌年は自然裸地が広がり、その後、一年生草本に遷移したが、一部では出水前のオギやツルヨシ群落などに戻ってきている箇所もみられる。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(植物)の秋季の結果を用いて比較を行った。

調査内容

調査時期		調査時期 設定根拠	調査年月
秋季	10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>この時期は、優占種となる草本類も十分に成長し、植生区分を行うのに適した時期であると考えられる。</li> </ul>	<b>【出水前】</b> 平成17年10月 平成26年10月 <b>【出水後】</b> 令和2年10月 令和3年10月 令和4年10月 令和5年10月

<調査方法>

現地調査は、調査地区内を歩きながら、生育する種を目視(木本については必要に応じて双眼鏡を使う)により確認し、和名を記録するとともに、調査ルートを河川環境基図等背景図に記録した。重要種や礫河原固有種、外来種が確認された場合には、確認位置、生育状況を記録した。



【植物相調査】



河川名	地区名	距離 (km)
多摩川	大師橋	1.4~2.6
	多摩川大橋	7.6~8.5
	宿河原堰	21.3~22.4
	大丸用水堰下流	31.5~32.5
	昭和用水堰上流	47.9~49.1
	多摩橋	50.0~51.0
	万年橋	61.3~61.5

## 2.出水影響調査 1)植物 2/6

- 令和元年出水前の植物の確認種数は349～428種であり、出水後は256～353種と減少した。
- 出水前に継続的に確認されていたウマノスズクサ、ホソバハマアカザとミゾコウジュ、カワラノギクの4種は、出水後の確認はない。しかしながら、ウマノスズクサは堤防法面にみられていた種であり、生息の可能性が高い。他の3種は出水後の他調査において別途地点で確認されている。
- 令和5年にマツモ、タカアザミの2種の重要種が確認され、出水後(令和2年以降)においては12種の重要種が確認されている。
- 特定外来生物のボタンウキクサは平成17年のみであり、それ以降の確認はない。また、令和5年にオオカワヂシャは確認されなかった。



### 特定外来生物

No.	目と和名	和名	調査年度						外来生物法
			H17	H26	R2	R3	R4	R5	
1	オモダカ目	ボタンウキクサ	●						特定外来生物
2	ユキノシタ目	オオフサモ	●	●	●	●	●	●	特定外来生物
3	ウリ目	アレチウリ	●	●	●	●	●	●	特定外来生物
4	シソ目	オオカワヂシャ	●		●	●	●		特定外来生物
5	キク目	オオキンケイギク	●	●	●	●	●	●	特定外来生物
合計	5目	5種	5種	3種	4種	4種	4種	3種	

### 重要種数

目名	種名	調査年度						環境省 RL2020	東京都RDB2023				神奈川県 RDB2022
		H17	H26	R2	R3	R4	R5		区部	北多摩	西多摩	南多摩	
ウラボシ目	ホラシノブ			●					EN	EN	EN	CR	
コショウ目	ウマノスズクサ	●	●						VU	VU	VU	VU	
オモダカ目	コウガイモ			●					CR	EN	DD	DD	CR
	セキショウモ				●	●	●		EX	EN	EN	CR	EN
	エビモ	●	●			●	●		CR	EN	EN	EN	
ヤマノイモ目	ササハモ					●	●		VU	VU	VU	EN	NT
	ニガカシュウ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT	
イネ目	ミクリ	※	●					NT	VU	NT	VU	VU	NT
	イセウキヤガラ					●	●		EN	—	—	—	EN
	シオクグ				●				VU	—	—	—	NT
	カンエンガヤツリ	●	●			●	●	VU	NT	NT	VU	VU	EN
	ミズガヤツリ	●							NT	VU	VU	VU	
	イソヤマテンツキ		●						NT	—	—	—	
	チョウセンガリヤス	●							VU	NT	VU	VU	
	アゼガヤ			●					DD	VU	DD	—	
アイアシ	●	●	●	●	●	●		VU	—	—	—	VU	
マツモ目	マツモ(広義)						●		EN	EN	CR	DD	EN
ユキノシタ目	タコノアシ	●	●		●		●	NT	VU	NT	NT	NT	
	ホザキノフサモ		●		●	●	●		CR	DD	EN	DD	
マメ目	カワラケツメイ	●			●	●	●		VU	VU	VU	VU	
バラ目	ミズ	●	●	●					EX	NT	NT		
	カワラサイコ	●		●					CR	VU	VU	VU	
ウリ目	ゴキツル	●				●	●		VU	EN	CR	CR	NT
キントラノオ目	コゴメヤナギ	●	●	●					NT	NT	VU	VU	
	ジャヤナギ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	VU	VU	
アオイ目	ハマボウ		●	●	●	●	●						EN
ナデシコ目	ホソバハマアカザ	●	●						VU	—	—	—	VU
	カワラアカザ					●	●		DD	DD	DD	DD	CR
シソ目	トウオオハコ	●							NT	—	DD	—	VU
	カワヂシャ				●		●	NT	VU	VU	VU	VU	
	コムラサキ				●				CR	DD	EN	DD	
	メハジキ	●							EN	VU	EN	VU	
	ミゾコウジュ	●	●					NT	VU	VU	VU	EN	
キク目	カワラヨモギ	●							DD	EX	VU	VU	
	カワラノギク	●	●					VU	EX	EW	EX	EN	EN
	ヒレアザミ	●											VU
	タカアザミ						●		VU	VU	VU	VU	EN
	タカサブロウ			●					留意種	留意種	留意種	留意種	
	カワラニガナ	●						NT	EX	VU	VU	NT	VU
ウラギク								NT	EN	—	—	EN	
15目	40種	25種	16種	10種	12種	14種	16種	8種	38種	38種	38種	37種	19種

注)東京都RDBの「—」: 絶滅危惧に該当すると判断されるが、データがないため、評価できていない種

●: 出水前まで2年以上確認され、出水後に確認がない種

○: 出水前に単年度のみ確認され、出水後に確認がない種

■: 出水後に新たに確認された種

○: 本調査では確認されていないが、別途地点で確認されている種

※H17年度はミクリ属として確認されており、種までの同定に至っていない

## 2.出水影響調査 1)植物 3/6

- 河川整備基本方針変更(令和5年3月)の主な注目種(掲載種)であるシオクグ、アイアシ、ミクリ、タコノアシ、カワラニガナ、カワラノギク、オギ、ヨシ、クロモ、ヒルムシロについて整理した。
- 各種の経年の確認状況を見ると、カワラニガナとカワラノギクは、出水後の確認はなかった。多摩橋地区の右岸礫河原には、カワラノギクが広く生育していたが、出水後にすべて流出していた。
- ただし、これらの2種は出水後の他調査において別地点で確認されている。

### 注目種

No.	和名	セグメント3					セグメント2-2					セグメント2-1					セグメント1																				
		下流部										中下流部					中上流部					上流部															
		大師橋					多摩川大橋					宿河原堰					大丸用水堰					昭和用水堰					永田橋					万年橋					
		H17	H26	R2	R3	R4	R5	H17	H26	R2	R3	R4	R5	H17	H26	R2	R3	R4	R5	H17	H26	R2	R3	R4	R5	H17	H26	R2	R3	R4	R5	H17	H26	R2	R3	R4	R5
1	シオクグ	●																																			
2	アイアシ	●	●	●	●	●	●																														
3	ミクリ														●																						
4	タコノアシ																																				
5	カワラニガナ																																				
6	カワラノギク																																				
7	オギ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
8	ヨシ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
9	クロモ																																				
10	ヒルムシロ	出水調査地区以外の他地区で確認されていた種である																																			

※赤点線は、令和元年の出水の前後を示す



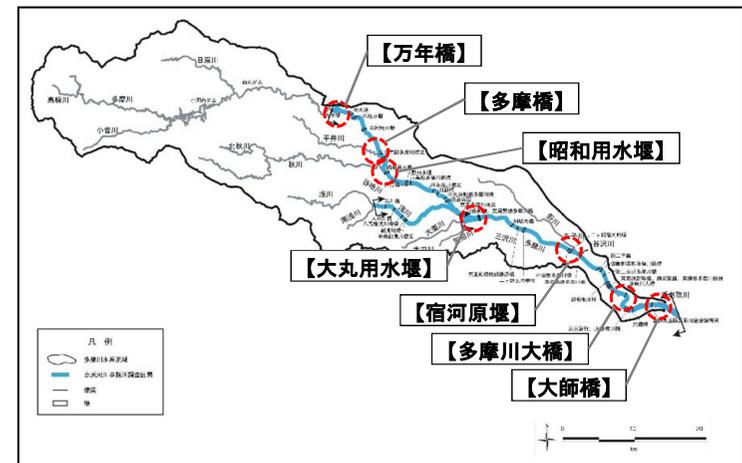
【シオクグ】



【ミクリ】

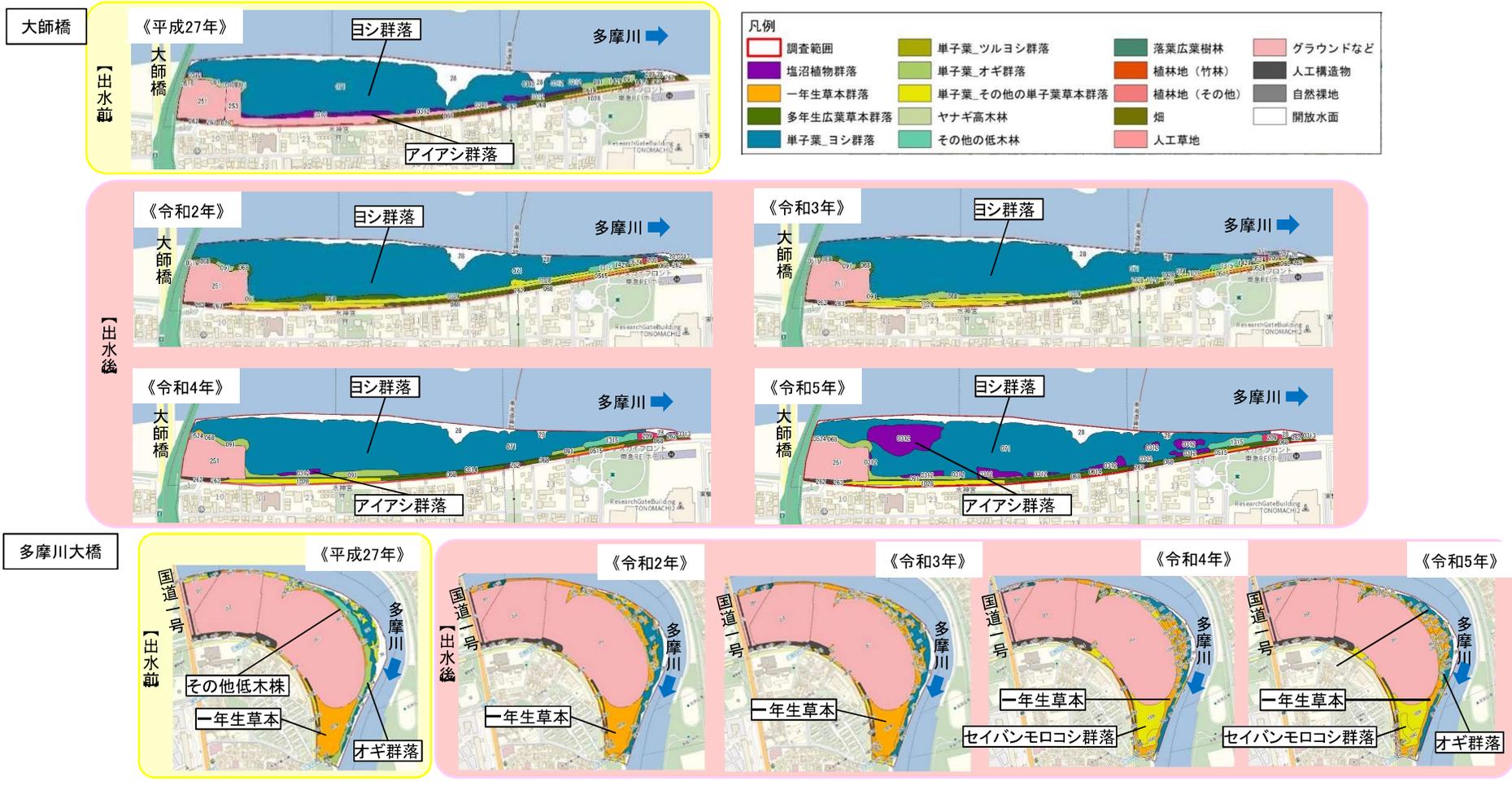


【カワラニガナ】

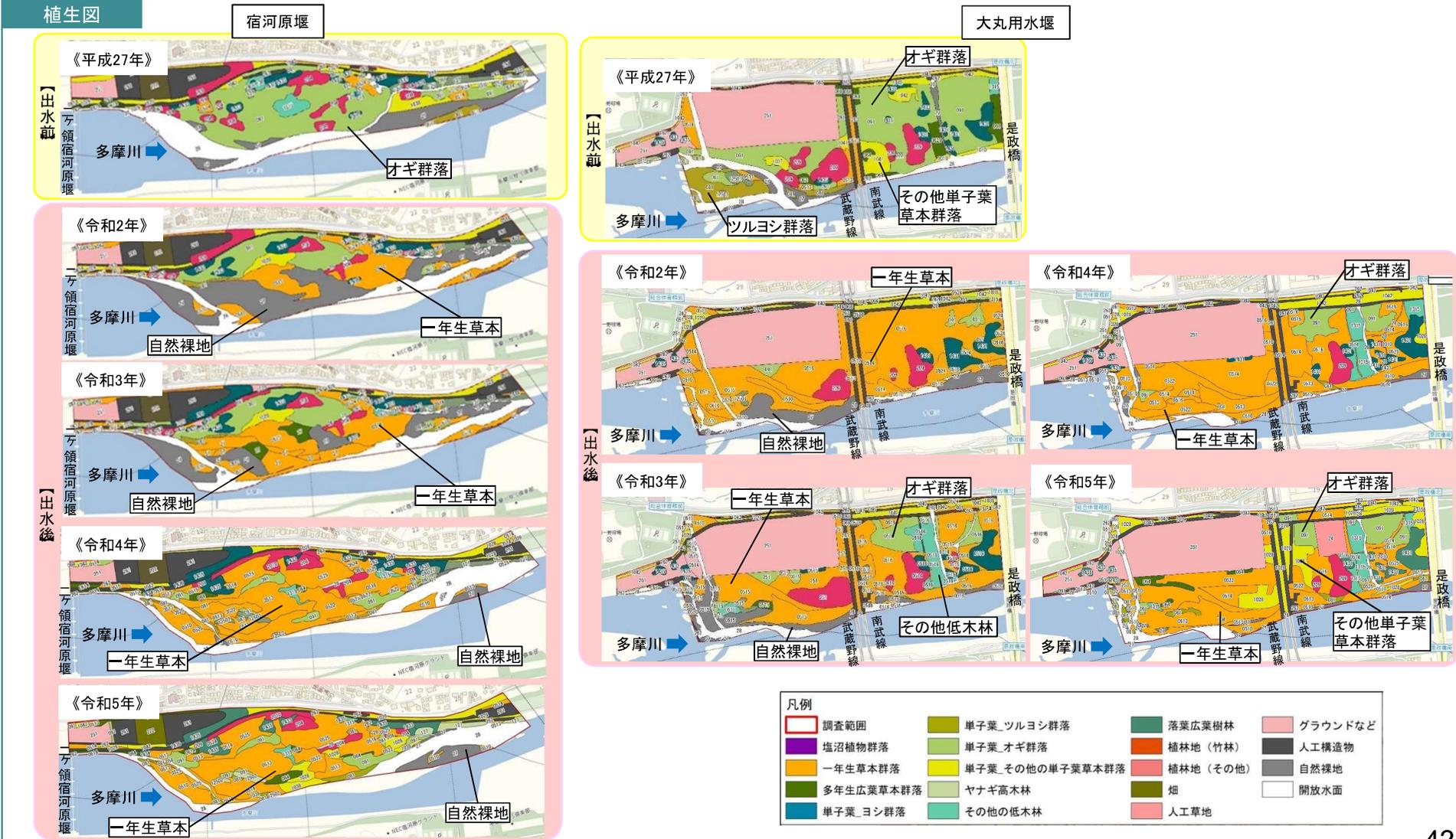


- 大師橋では、R1.10出水で塩沼湿地植物のアイアシ群落が消滅し、ヨシ群落が増加したが、R4からヨシ群落がアイアシ群落に植生が遷移し、出水前のH27に戻っている。
- 多摩川大橋では、R1.10出水で木本及びオギ群落が生出し、R2・R3には先駆的に一年生草本群落が増加したが、R4調査以降は外来種のセイバンモロコシ群落に遷移し、R5調査ではオギ群落が局所的に増加した。

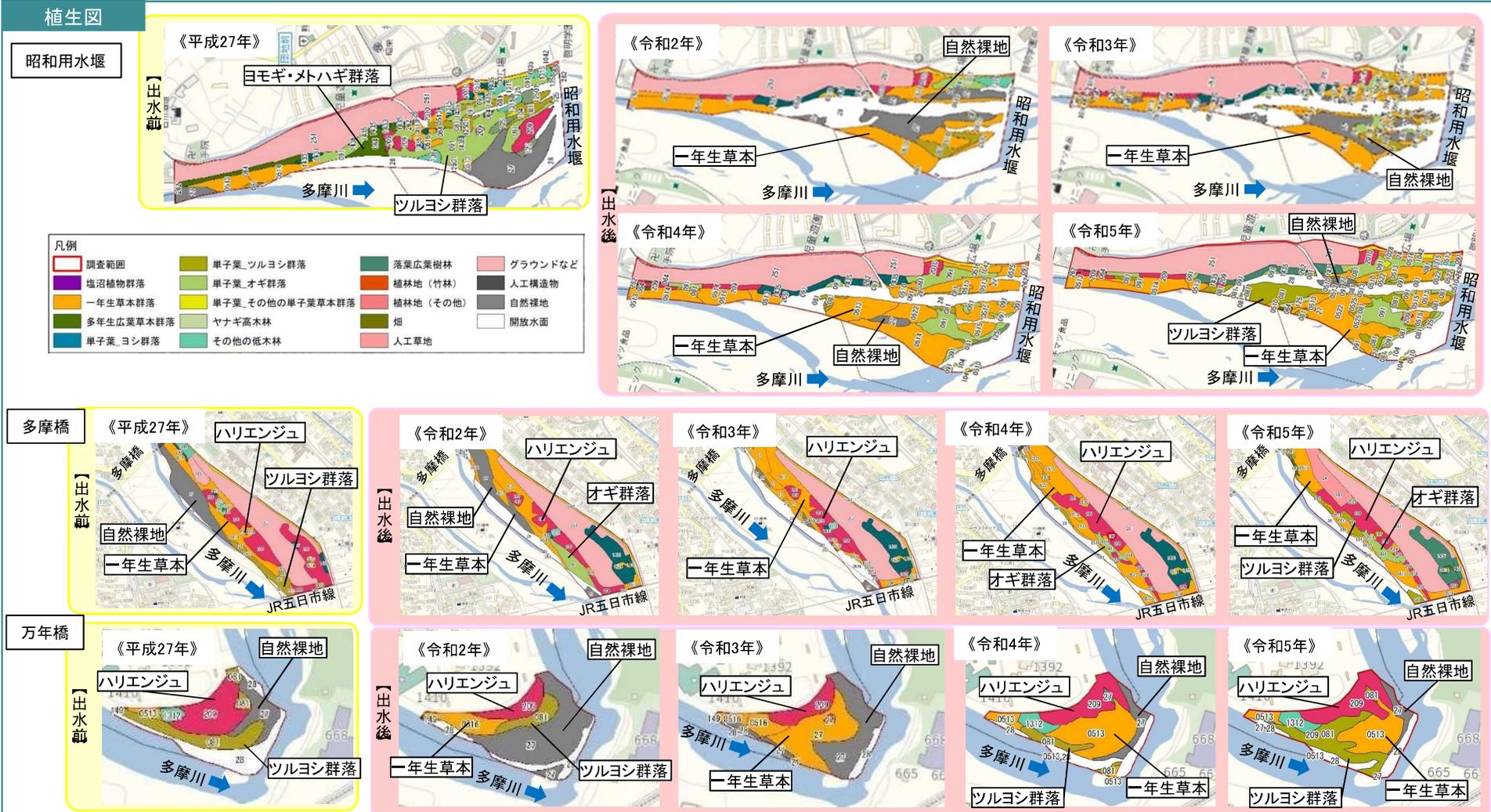
植生図



- 宿河原堰では、R1.10出水でオギ群落が出し、自然裸地の後、徐々にR5にかけて一年生草本群落に遷移した。
- 大丸用水堰では、R1.10出水でオギ群落等が流出し、一年生草本群落が増加したが、R3調査以降はオギ群落やその他の単子葉植物に遷移し、増加傾向になっている。



- 昭和水堰では、R1.10出水でオギ群落、ヨモギ-メトハギ群落、ツルヨシ群落が生出し、直後には先駆的に一年生草本群落が増加したが、R5調査ではツルヨシ群落へ植生が遷移し、H27調査時の状況に戻つつある。
- 多摩橋および万年橋では、R1.10出水でツルヨシ群落が生出し、自然裸地の後に一年生草本群落が増加したが、R5調査から一部でオギ群落、ツルヨシ群落に遷移し、出水前のH27に戻ってきている。

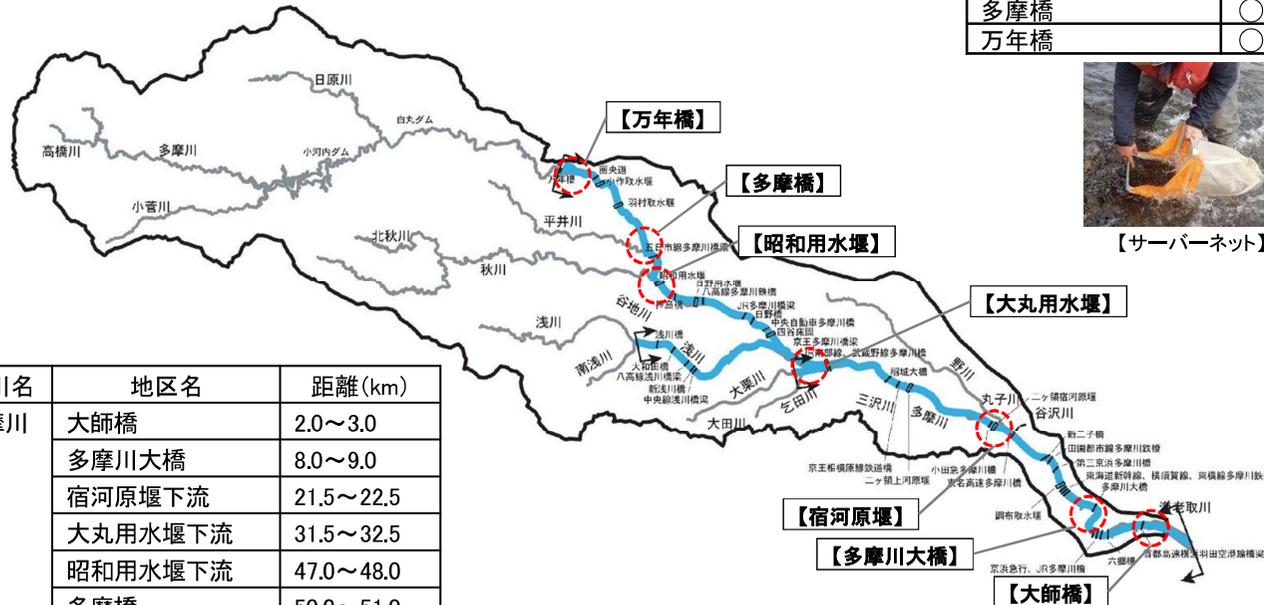


- 出水に伴う底生動物の変化をみるための調査は、初春季に実施した。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(底生動物)の初春季の結果を用いて比較を行った。

調査内容

調査時期	調査時期設定根拠	調査年月
初春季	<ul style="list-style-type: none"> <li>水生昆虫は春季に羽化するグループが最も多く、この時期に最も生物相が豊富である。</li> <li>採集される個体は終齢幼虫が多いことが期待されるため、同定が容易と考えられる。</li> <li>水生昆虫以外の底生動物の初春季における出現状況の把握が期待される。</li> </ul>	<b>【出水前】</b> 平成24年2月 平成30年1~2月 <b>【出水後】</b> 令和2年2月 令和3年2月 令和4年1月 令和6年2月

地区名	定量採集			底生採集									
	ネット	サーバー	ジ探泥器	エクマンバー	方形枠	ネット	ローレム	サデ網	ドレッジ	タガネスクレーパー	ジョレン	ポンプ	ヤビー
大師橋				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
多摩川大橋				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宿河原堰下流	○					○	○						
大丸用水堰下流	○					○	○						
昭和用水堰下流	○					○	○						
多摩橋	○					○	○						
万年橋	○					○	○						



河川名	地区名	距離(km)
多摩川	大師橋	2.0~3.0
	多摩川大橋	8.0~9.0
	宿河原堰下流	21.5~22.5
	大丸用水堰下流	31.5~32.5
	昭和用水堰下流	47.0~48.0
	多摩橋	50.0~51.0
	万年橋	61.0~62.0



【サーバーネット】



【エクマンバージ探泥器】



【方形枠】



【ドレッジ】



【スクレーパー】



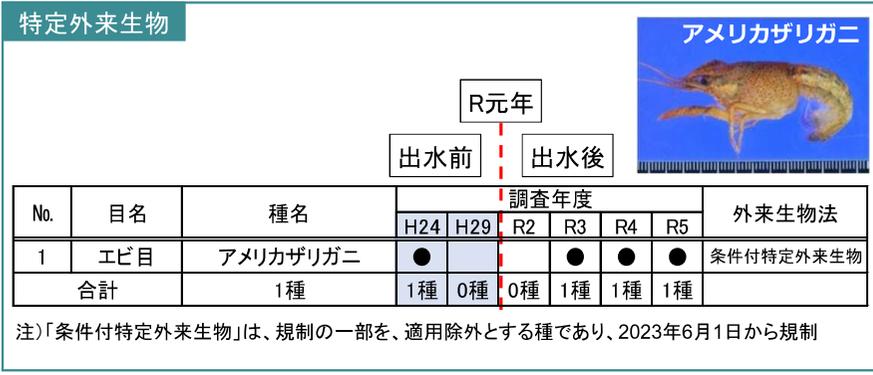
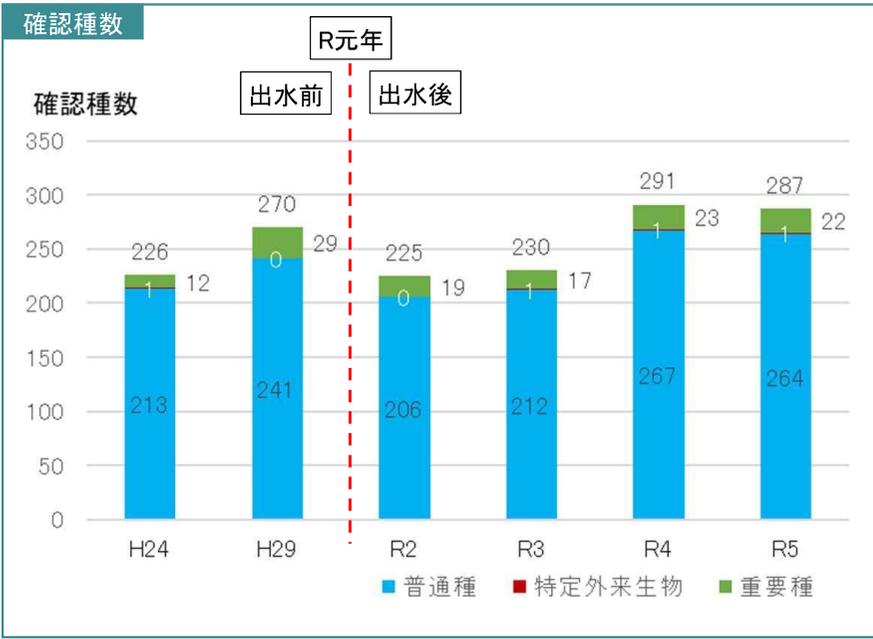
【ジョレン】



【ヤビーポンプ】

# 出水影響調査 2) 底生動物 2/3

- 底生動物の確認種数は、令和元年出水前は226～270種であったが、出水直後の令和2～3年に225～230種に減少したが、令和4年以降、287～291種と増加傾向になっている。
- 重要種では、出水後に確認されていない種が8種あり、その内5種は汽水域に生息する種であった。
- 出水後に新たに確認された種は13種であった。
- 特定外来生物は、アメリカザリガニ1種のみで変化はみられなかった。



### 重要種数

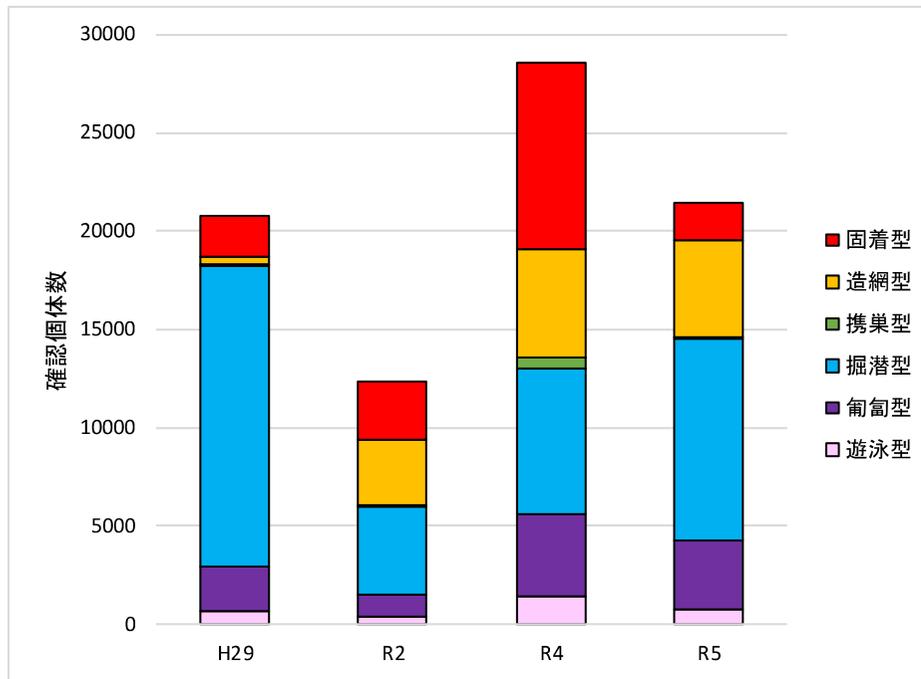
No.	目名	種名	調査年度					環境省 RL 2020	東京都RDB2023					神奈川県 RDB 2006			
			出水前		出水後				区部	北多摩	南多摩	西多摩	多摩部				
			H24	H29	R2	R3	R4		R5								
1	新生腹足目	クリイロカワザンショウガイ(汽)	●	●	●	●	●	NT									
2		ヒラドカワザンショウガイ(汽)	●	●	●	●	●	NT									
3		カワザンショウガイ(汽)	●	●	●	●	●	NT									
4		ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ(汽)	●	●	●	●	●	NT	NT								
5		ヨシダカワザンショウガイ(汽)	●	●	●	●	●	NT	VU								
6		エドガワミズゴマツボ(汽)	●	●	●	●	●	●	NT								
7	汎有肺目	コシダカヒメノアラガイ	●	●	●	●	●	DD									
8		モノアラガイ	●	●	●	●	●	NT	CR+EN	—	—	DD					
9		ミスコハクガイ(汽)	●	●	●	●	●	VU	—	—	CR+EN	—					
10		ヒラマキズマイマイ	●	●	●	●	●	DD	DD	DD	DD	DD					
11		トウキョウヒラマキガイ	●	●	●	●	●	DD	CR+EN	—	—	—					
12	マルスダレガイ目	ガタツキ(汽)	●	●	●	●	●	DD									
13		ヤマトシジミ(汽)	●	●	●	●	●	NT	DD								
14		マメシジミ属	●	●	●	●	●	DD	DD	—	DD	—					
15		エビ目	ヌカエビ	●	●	●	●	●	留意種	留意種	留意種	留意種					
16		テナガエビ	●	●	●	●	●	留意種	留意種	—	—						
17		ユビナガスジエビ(汽)	●	●	●	●	●	DD									
18		シラタエビ(汽)	●	●	●	●	●	DD									
19		スジエビ	●	●	●	●	●	留意種	留意種	留意種	留意種						
20		ハサミヤコエビ(汽)	●	●	●	●	●	DD									
21		ニホンズナモグリ(汽)	●	●	●	●	●	DD									
22		サワガニ	●	●	●	●	●	留意種	留意種	留意種	留意種						
23		クロベケイガイ(汽)	●	●	●	●	●	留意種									
24		モクスガニ(汽)	●	●	●	●	●	留意種	留意種	留意種	—						
25		アシハラガニ(汽)	●	●	●	●	●	留意種									
26		チヨゴニ(汽)	●	●	●	●	●	留意種									
27		ヤマトオサガニ(汽)	●	●	●	●	●	留意種									
28	トンボ目(蜻蛉目)	ハグロトンボ	○	○	○	○	○	VU					要注意				
29		ニホンカワトンボ	●	●	●	●	●	EX					EN				
30		コシボソヤンマ	●	●	●	●	●	EX					VU				
31		ヤマサナエ	●	●	●	●	●	EX					VU				
32		アオサナエ	●	●	●	●	●	EX					VU				
33		ホシサナエ	●	●	●	●	●	EN					VU				
34		ヒメサナエ	●	○	○	○	○	○					DD				
35		コヤマトンボ	●	●	●	●	●	VU					NT				
36	カメシ目(半翅目)	コムシシ属	●	●	●	●	●						DD				
40		ハラグロコムシシ	●	●	●	●	●						DD				
37	ヘビトンボ目	タイリククロスジヘビトンボ	●	●	●	●	●	DD					DD				
38		ヤマトクロスジヘビトンボ	●	●	●	●	●	CR					NT				
39		ネグロセンブリ	●	●	●	●	●	VU					VU				
40	ハエ目(双翅目)	カスミハネカ	●	●	●	●	●	DD									
41	コウチュウ目(鞘翅目)	キベリマメゲンゴロウ	●	●	●	●	●	NT	—				—				
42		クビボヨコシラミズムシ	●	●	●	●	●	DD	—				—				
43		ゲンジボタル	●	●	●	●	●	EN					NT				
44	ハチ目(膜翅目)	ミスバチ	●	●	●	●	●	DD									
合計			10種	45種	12種	29種	19種	17種	23種	22種	15種	37種	10種	10種	10種	12種	10種

注) 東京都RDBの「—」: 絶滅危惧に該当すると判断されるが、データがないため、評価できていない種  
 ○: 重要種の指定がない区域での確認  
 ●: 出水前まで2年以上確認され、出水後に確認がない種  
 ○: 出水前に単年度のみ確認され、出水後に確認がない種  
 ●: 出水後に新たに確認された種、(汽): 汽水域に生息する種

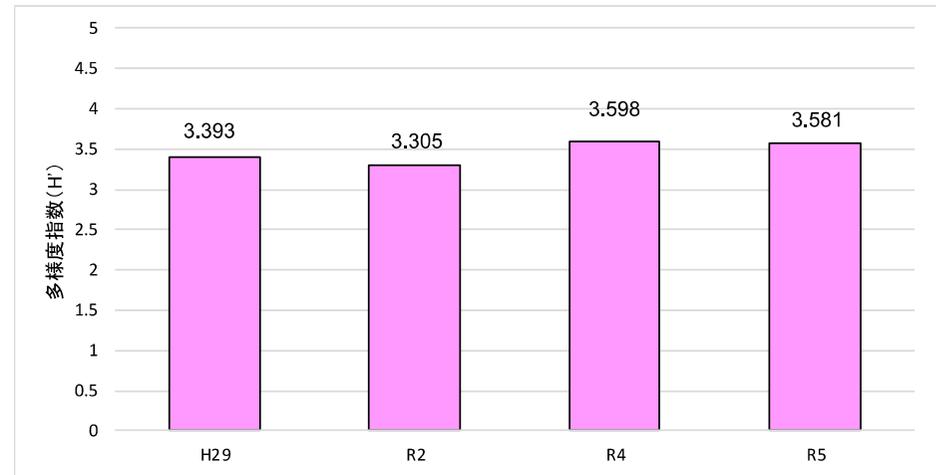
- 令和元年洪水による底生動物への影響を分析した。
- 生活型別で整理すると、R4調査まで石礫や倒流木等の表面に体や巣を固着させて生活する固着型の個体数が増加していたが、R5調査では減少し、砂や泥の中に潜る掘潜型の個体数が増加した。
- このことから、令和元年洪水直後には砂やシルトがほとんど流され、大きい粒径の礫が主たる河床材料となったため、固着型の個体数が増加したが、洪水から数年が経過して、砂やシルトが再び増えてきたことから、掘潜型の個体数が増加したと考えられる。
- 底生動物種の多様性をShannon-Wienerの多様度指数(1958)でみると、令和2年調査で微減していたが、令和4年調査で増加しており、回復傾向にあると考えられる。

固着型の個体数

出水前後の生活型別個体数割合



多様性指数



注) 多様度はShannon-Wienerの多様度指数(1958)を用いた。

$$H' = - \sum_{i=1}^S P_i \log_e P_i$$

ここで、  
 S: 標本中の種類数  
 pi: i番目の種類の個体数が総個体数に占める割合



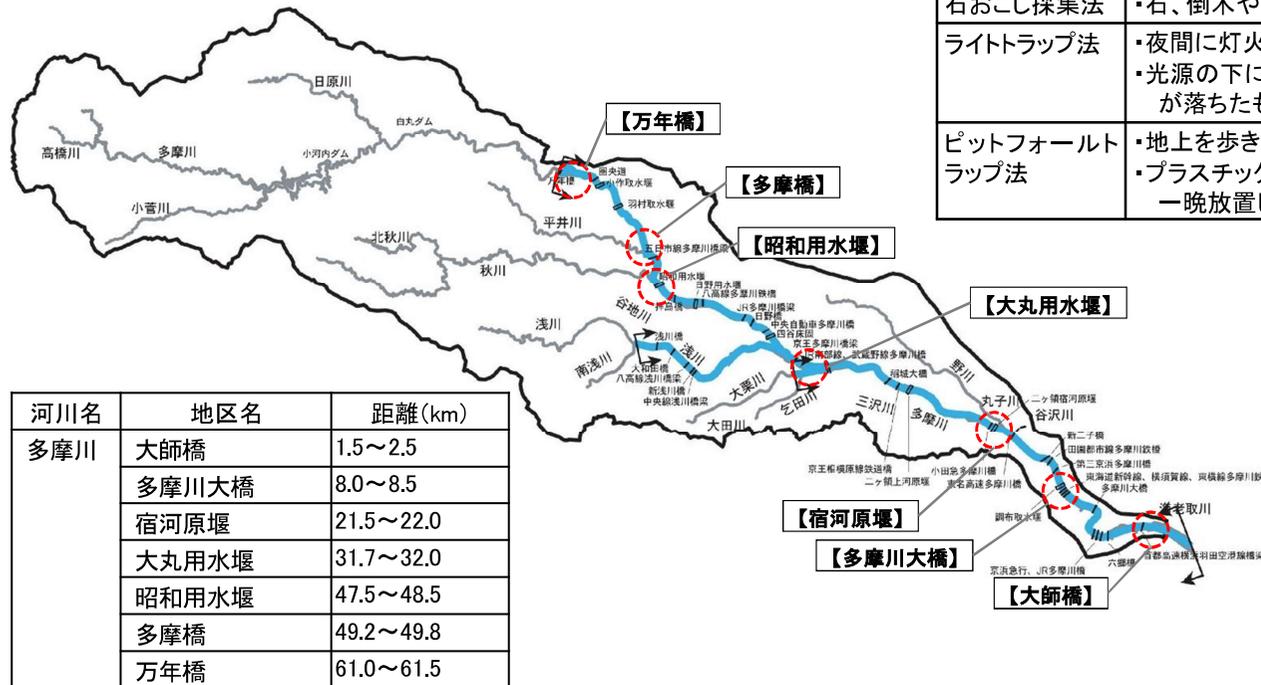
固着型 (ヒラタドロムシの幼虫) 造網型 (ヒゲナガカワトビケラ) 携巢型 (コカクツツトビケラ属) 掘潜型 (モンカゲロウ属) 匍匐型 (ゲンジボタル) 遊泳型 (ナベブタムシ)

- 出水に伴う陸上昆虫類の変化をみるための調査は、夏季に実施した。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類)の夏季の結果を用いて比較を行った。

調査内容

調査時期	調査時期設定根拠	調査年月
夏季 7月中旬 ～下旬	・梅雨明けの時期にあたり、本格的に暑くなり昆虫の活動が活発になり、夏季に出現する昆虫類の確認が期待できる。	【出水前】 平成21年6月 平成31年7月 【出水後】 令和3年7月 令和4年7月 令和5年7～8月

調査方法	調査内容
見つけ採り法	・陸上昆虫類等を肉眼で見つけて捕まえる方法で、見つけた陸上昆虫類やクモ類を捕虫網や手で直接採集
スウィーピング法	・樹林地、低木林、草原で用いられる方法で、捕虫ネットを強く振り、草や木の枝の先端や、花をなぎ払うようにしてすくいとることで、木や草、花の上に静止している陸上昆虫類等を採集
ビーティング法	・木の枝、草等を叩き棒で叩いて、下に落ちた陸上昆虫類等を白いネット等で受けとって採集
石おこし採集法	・石、倒木やゴミを起こして、そこに生息している陸上昆虫類等を採集
ライトトラップ法	・夜間に灯火に集まる昆虫類の習性を利用して採集 ・光源の下に、捕虫器を設置し、光源をめがけて集まった陸上昆虫類が落ちたものを、捕虫器で採集
ピットフォールトラップ法	・地上を歩きまわる陸上昆虫類等を採集 ・プラスチック製カップを開口部が地表面と同じ高さになるように埋め、一晩放置した後に落下した陸上昆虫類を採集



【スウィーピング法】



【ビーティング法】



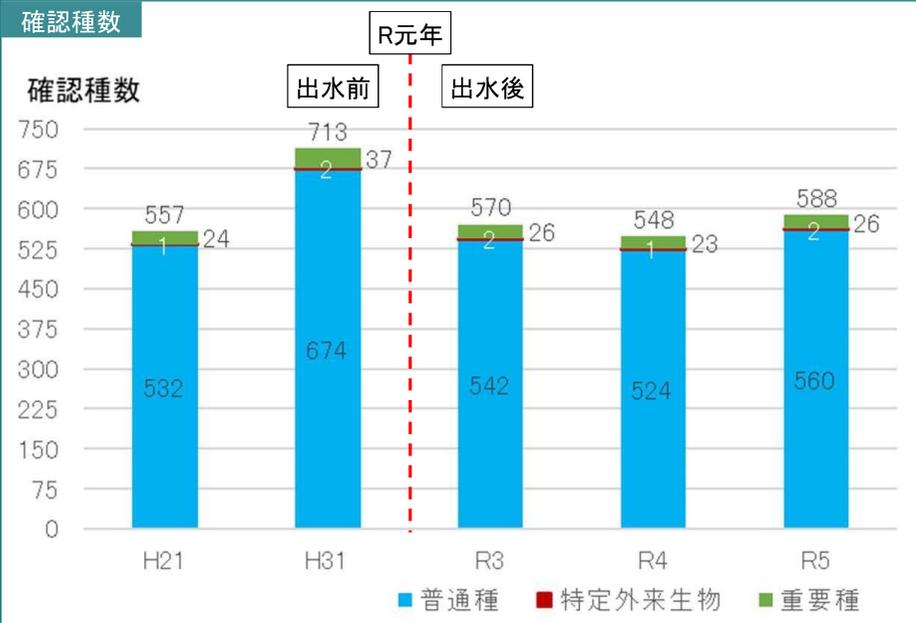
【ライトトラップ】



【ピットフォールトラップ法】

# 出水影響調査 3)陸上昆虫類 2/3

- 令和元年出水後の陸上昆虫類の確認種数は548～588種であり、出水前の557～713種に比べて減少した。重要種の種数も、出水後は23～26種であり、出水前の24～37種に比べて減少している。
- 出水前に継続的に確認されていたオオイトトンボとギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリは、出水後の確認はない。オオイトトンボが生息するワンドやたまりや、ギンイチモンジセセリとミヤマチャバネセセリの幼虫の食草となるススキやヨシ、チガヤなどのイネ科植物は存在するため、今後、周辺地域からの飛来による個体群の供給が期待される。
- 令和5年にキイロホソゴミムシとコオナガミズスマシの2種の重要種が新たに確認されている。
- 特定外来生物はアカボシゴマダラとクビアカツヤカミキリの2種であり、令和4年に確認されなかったクビアカツヤカミキリは令和5年に確認されている。



### 特定外来生物

アカボシゴマダラ

クビアカツヤカミキリ

No.	目名	種名	調査年度					外来生物法
			H21	H31	R3	R4	R5	
1	チョウ目	アカボシゴマダラ	●	●	●	●	●	特定外来生物
2	コウチュウ目	クビアカツヤカミキリ		●	●		●	特定外来生物
合計			1種	2種	2種	1種	2種	

### 重要種数

No.	目名	種名	調査年度					調査年度													
			H21	H31	R3	R4	R5														
1	クモ目	キノコウエトタゲクモ																			
2		コガネグモ	○	●																	
3		ヨコフカニグモ					○														
4	トンボ目(蜻蛉目)	オオイトトンボ		●	●	●	●	●													
5		イトトンボ		●	●	●	●	●													
6		クロイトトンボ		●	●	●	●	●													
7		オオイトトンボ		●	●	●	●	●													
8		キノサントンボ		●	●	●	●	●													
9		ハズロトンボ		●	●	●	●	●													
10		ササガサギマ		●	●	●	●	●													
11		コフキトンボ		○	●	●	●	●													
12		ハナバトトンボ		○	●	●	●	●													
13		チュウトンボ		●	●	●	●	●													
14		マユタテアカネ		●	●	●	●	●													
15		ヒメマダラ		●	●	●	●	●													
16	バタ目(直翅目)	ヒガシキリギリス		○	●	●	●	●													
17		ハダケノマオイ		●	●	●	●	●													
18		ケラ		●	●	●	●	●													
19		ヒロハ鉄カシタン		●	●	●	●	●													
20		カワアシタテ		●	●	●	●	●													
21		クルマバシタテ		●	●	●	●	●													
22		シヨウリウウバシタテ		○	○	●	●	●													
23		ナキイナゴ		○	○	●	●	●													
24		ニホヒメナガシバシタテ		○	○	●	●	●													
25	カメシ目(半翅目)	ヤマトシジミ		○	○	●	●	●													
26		ヒメナガメ		●	●	●	●	●													
27		エリキアムシ		●	●	●	●	●													
28		コヒメシジミ		●	●	●	●	●													
29	チョウ目(鱗翅目)	タイミンウセセリ		●	●	●	●	●													
30		ギンイチモンジセセリ		●	●	●	●	●													
31		ミヤマチャバネセセリ		○	●	●	●	●													
32		オオチャバネセセリ		●	●	●	●	●													
33		コムラサキ		●	●	●	●	●													
34		メスクロヒヨウモン		●	●	●	●	●													
35		ヒメガサエウ		●	●	●	●	●													
36		ジメムシ		●	●	●	●	●													
37		ヒメワタナシ		●	●	●	●	●													
38		コシロシバ		●	●	●	●	●													
39		ヌスビトハギ		●	●	●	●	●													
40	ハチ目(双翅目)	コウチウメ		●	●	●	●	●													
41	コウチュウ目(鞘翅目)	ヨツボシツヤカミキリ		○	○	●	●	●													
42		キアシマルヤマトシジミ		●	●	●	●	●													
43		フタモンクビナガシバ		●	●	●	●	●													
44		ヨツボシツヤカミキリ		●	●	●	●	●													
45		オオマルヤマトシジミ		●	●	●	●	●													
46		キイロホソゴミムシ		●	●	●	●	●													
47		ヤマトツクリゴミムシ		●	●	●	●	●													
48		ヨツボシゴミムシ		●	●	●	●	●													
49		ヒメアサギ		●	●	●	●	●													
50		イロチクアサギ		○	●	●	●	●													
51		カマキリ		●	●	●	●	●													
52		キアシマルヤマトシジミ		●	●	●	●	●													
53		オビモンクビナガシバ		●	●	●	●	●													
54		クビナガシバ		●	●	●	●	●													
55		コヒメシジミ		●	●	●	●	●													
56		ヒメワタナシ		●	●	●	●	●													
57		ハンノキヨコガネ		●	●	●	●	●													
58		ヒゲヨコガネ		●	●	●	●	●													
59		シメジ		●	●	●	●	●													
60		シメジ		●	●	●	●	●													
61		シメジ		●	●	●	●	●													
62		アイヌテントウ		●	●	●	●	●													
63		ヤマトシジミ		●	●	●	●	●													
64		ヒメアサギ		●	●	●	●	●													
65		ジュンサイ		●	●	●	●	●													
66	ハチ目(膜翅目)	キボシツクリ		●	●	●	●	●													
67		キボシツクリ		●	●	●	●	●													
68		キボシツクリ		●	●	●	●	●													
69		クビナガシバ		●	●	●	●	●													
70		クビナガシバ		●	●	●	●	●													

注) 東京都RDBの「-」: 絶滅危惧に該当すると判断されるが、データがないため、評価できていない種  
 ○: 重要種の指定がない区域での確認、●: 出水前まで2ヶ年以上確認され、出水後に確認がない種  
 ■: 出水前に単年度のみ確認され、出水後に確認がない種、■: 出水後に新たに確認された種

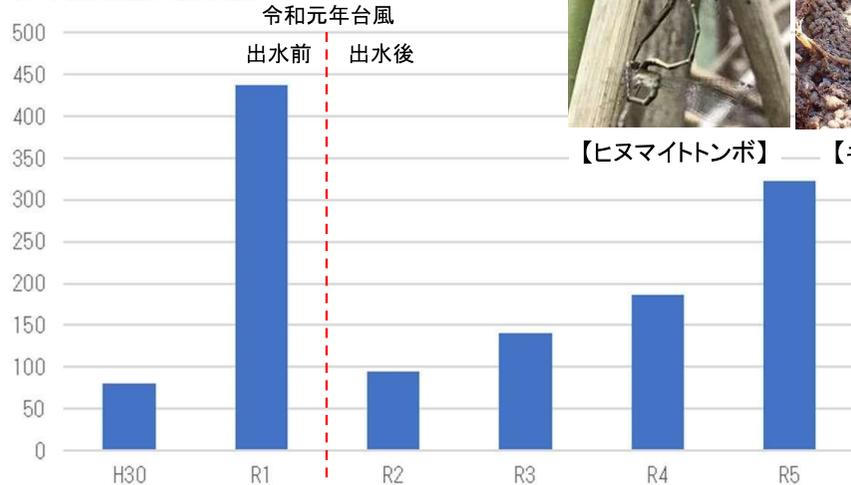
第6回多摩川河川整備計画有識者会議(令和7年3月5日) 資料-5

- 河川整備基本方針変更(令和5年3月)の主な注目種(掲載種)である、ヒヌマイトトンボとキイロホソゴミムシについて整理した。
- 令和元年出水後、六郷のヒヌマイトトンボ生息地には大量の土砂が堆積し、翌年の令和2年2月12日のキイロホソゴミムシ調査においては、海浜性の甲虫類は確認できなかった。
- しかし、ヒヌマイトトンボは、令和2年度に個体数は減少したものの確認され、その後、回復傾向にある。
- また、キイロホソゴミムシは、令和2年12月には個体が確認され、その後も1~3個体程度が確認されている。

注目種

《ヒヌマイトトンボの経年確認状況》

各年度の最大個体数



【ヒヌマイトトンボ】 【キイロホソゴミムシ】

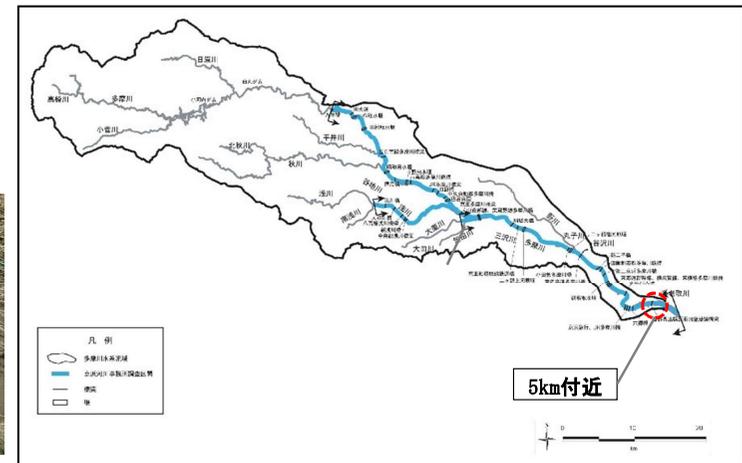
《キイロホソゴミムシの経年確認状況》

日程	イベント	確認状況
令和元年10月12日	令和元年東日本台風	-
令和2年2月	工事施工前調査	確認なし
令和2年3月	自然再生工事施工	-
令和2年5月	工事施工直後調査	確認なし
令和2年12月	工事施工後調査	キイロホソゴミムシ 1個体
令和4年1月	工事施工後調査	キイロホソゴミムシ 2個体
令和5年1月	工事施工後調査	キイロホソゴミムシ 2個体
令和6年1月	工事施工後調査	キイロホソゴミムシ 3個体

※各年度最大個体数とは、各年度に3回(3巡/回)において、1巡における最大個体数を示す。



【ヒヌマイトトンボ生息地(出水直後の様子)】



- 出水に伴う魚類の変化をみるための調査は、春季に実施した。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(魚類)の春季調査結果を用いて比較を行った。

調査内容

調査時期		調査時期設定根拠	調査年月
春季	5月下旬 ～ 6月中旬	水温が上昇し、魚類の活動が活発になり始める時期であるため、採捕確認に適する。また、春から初夏にかけて遡上する通し回遊魚を始め、河川内に侵入する汽水魚・海水魚も多いため、多くの魚種の確認が期待できるほか、孵化した稚魚の分布状況が確認できる。	【出水前】 平成18年5～6月 平成23年6月 平成28年6月 【出水後】 令和3年6～7月 令和4年5～6月 令和5年5～6月

地区名	投網	タモ網	サデ網	刺網	はえなわ	どう	定置網	地曳網	セル瓶
大師橋	○	○	○	○	○	○	○	○	○
多摩川大橋	○	○	○	○	○	○	○	○	○
宿河原堰下流	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大丸用水堰下流	○	○	○	○	○	○	○	○	○
昭和用水堰下流	○	○	○	○	○	○	○	○	○
多摩橋	○	○	○	○	○	○	○	○	○
万年橋	○	○	○	○	○	○	○	○	○



【投網】



【タモ網】



【地曳網】

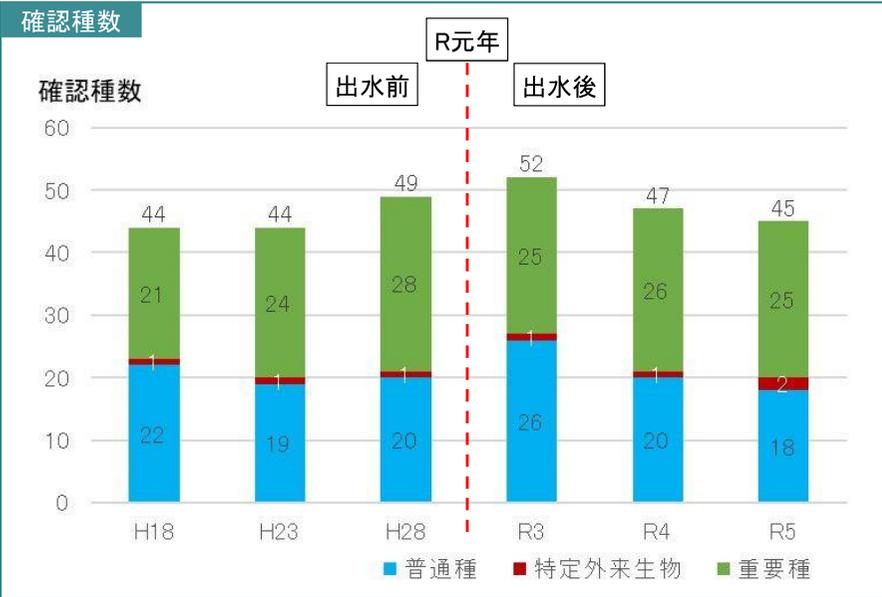


【定置網】



【セル瓶】

- 令和元年出水後の魚類の確認種数は45～52種であり、出水前の44～49種とほぼ同程度であった。
- 出水前に単年度のみ確認されたクルマサヨリ、または、出水前に確認が途絶えたトビハゼ、トウヨシノボリを除くと、ヒメハゼを除くすべての重要種が出水後も確認されており、出水後の令和5年にツチフキとクロダハゼの2種が、新たに確認されている。
- ヒメハゼは汽水域の砂底、砂泥底に生息する種であり、多摩川では出水調査対象地区の下流側の地区で多くの個体(H28,H23)が捕獲されており、河口に生息している可能性がある。
- 特定外来生物は、令和4年まではコクチバス1種のみであったが、令和5年にオオクチバスが発見され2種となった。



### 特定外来生物

オオクチバス

コクチバス

No.	目名	種名	調査年度						外来生物法
			H18	H23	H28	R3	R4	R5	
1	スズキ目	オオクチバス						●	特定外来生物
2		コクチバス	●	●	●	●	●	●	
合計	1目	2種	1種	1種	1種	1種	1種	2種	

### 重要種数

No.	目名	種名	調査年度						環境省 RL2020	東京都RDB2023					神奈川 RDB2006
			H18	H23	H28	R3	R4	R5		区部	北多摩	南多摩	西多摩		
1	ヤツメウナギ目	スナヤツメ類	●	●	●	●	●	●	VU	CR	CR	CR	CR	EN	
2	ウナギ目	ニホウナギ	●	●	●	●	●	●	EN	EN	EN	EN	EN		
3	コイ目	ギンナ	●	●	●	●	●	●		DD	DD	DD	DD		
4		オイカフ	●	●	●	●	●	●		DD	DD	DD	DD		
5		アブラハヤ	●	●	●	●	●	●		VU	VU	VU	CR	NT	
6		マルタ	※1	※1	※1	●	●	●		NT	NT	NT		VU	
7		ウグイ	○	○	●	○	○	●						NT	
8		ツチフキ						●	(EN)						
9		カマツカ(カマツカ類)	○	○	●	●	●	●						NT	
10		ニゴイ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	○	○	VU	
11		ドジョウ	●	●	●	●	●	●	NT	DD	DD	DD	DD		
12		ヒガシシマドジョウ	●	●	●	●	●	●		VU	VU	NT	NT	NT	
13		ホトケドジョウ	●	●	●	●	●	●	EN	EN	EN	EN	EN	EN	
14	ナマズ目	ギバチ		●	●	●	●	●	VU	CR	VU	VU	VU	CR	
15		ナマズ	●	●	●	●	●	○						注目	
16		アカザ	●	●	●	●	●	●	VU					CR	
17	サケ目	サクラマス(ヤマメ)	●	●	●	●	●	●	NT						
18	ダツ目	ミナミメダカ	●	●	●	●	●	●	VU	CR	CR	CR	CR		
19		クルマサヨリ			●				NT	CR					
20	スズキ目	キチヌ			●									DD	
21		カジカ	●	●	●	●	●	●	NT			EN	EN	VU	
22		カワアナゴ						●						EN	
23		トビハゼ	●	●					NT	CR				EN	
24		アシシロハゼ	●	●	●	●	●	●		NT					
25		アベハゼ	●	●	●	●	●	●		NT					
26		マサゴハゼ	●	●	●	●	●	●	VU	VU				DD	
27		スマチチブ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT		
28		チチブ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT	—	
29		トウヨシノボリ	●	●	●	●	●	●		DD	DD	DD	DD		
30		クロダハゼ						●		CR		CR	CR		
31		ウロハゼ	●	●	●	●	●	●						注目	
32		ヒメハゼ	●	●	●	●	●	●		NT					
33		スミウキゴリ	●	●	●	●	●	●						NT	
34		ウキゴリ	●	●	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT		
35		ピリngo※2	●	●	●	●	●	●		NT					
36		ムサシノジュスカケハゼ	●	●	●	●	●	●	EN	DD	DD	DD	DD	DD	
37		エドハゼ	●	●	●	●	●	●	VU	VU				DD	
7月			21種	24種	28種	25種	26種	25種	15種	26種	17種	19種	18種	20種	

注) H23年以前に確認されていたジュスカケハゼは、ムサシノジュスカケハゼに種名変更  
 注) 東京都RDBの「—」: 絶滅危惧に該当すると判断されるが、データがないため、評価できていない種  
 ○: 重要種の指定がない区域での確認  
 ●: 出水前まで2ヶ年以上確認され、出水後に確認がない種  
 ■: 出水前に確認が途絶えた種、または単年度しか確認されていない種  
 ■: 出水後に新たに確認された種  
 ※1: マルタは、本表ではH28年以前の確認はないが、他地点において主に秋調査で確認  
 ※2: ピリngoは、2023年に東京都RDBから除外

- 河川整備基本方針変更(令和5年3月)の主な注目種(掲載種)であるトビハゼ、ウグイ、アユ、ミナミメダカ、ヒガシシマドジョウウ、アブラハヤ、カジカ、ホトケドジョウウについて整理した。
- 出水後に確認されなくなった種はトビハゼのみであったが、トビハゼは出水前の平成28年度にも確認されていない。
- ミナミメダカの確認地区についてみると、令和3~4年は出水後に確認された地区は大丸用水堰のみであったが、令和5年に大師橋と多摩川大橋で確認された。なお、宿河原堰、昭和用水堰、多摩橋、万年橋では確認されていない。

注目種

区分	セグメント3		セグメント2-2					セグメント2-1					セグメント1																															
													下流部															上流部																
													大師橋					多摩川大橋					宿河原堰					大丸用水堰					昭和用水堰					永田橋					万年橋	
目名	No.	種名	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5	H18	H23	H26	R3	R4	R5
スズキ目	1	トビハゼ	●	●																																								
コイ目	2	ウグイ																																										
サケ目	3	アユ																																										
ダツ目	4	ミナミメダカ		●				●																																				
コイ目	5	ヒガシシマドジョウ																																										
コイ目	6	アブラハヤ																																										
スズキ目	7	カジカ																																										
コイ目	8	ホトケドジョウ																																										

※赤点線は、令和元年の出水の前後を示す



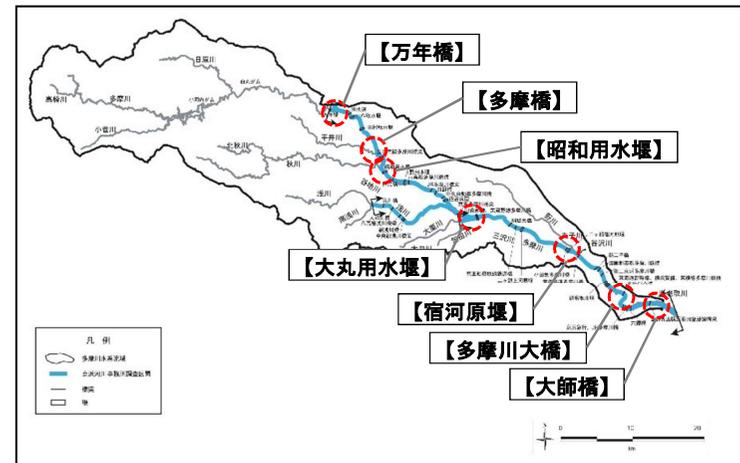
【アブラハヤ】



【ウグイ】



【ヒガシシマドジョウ】

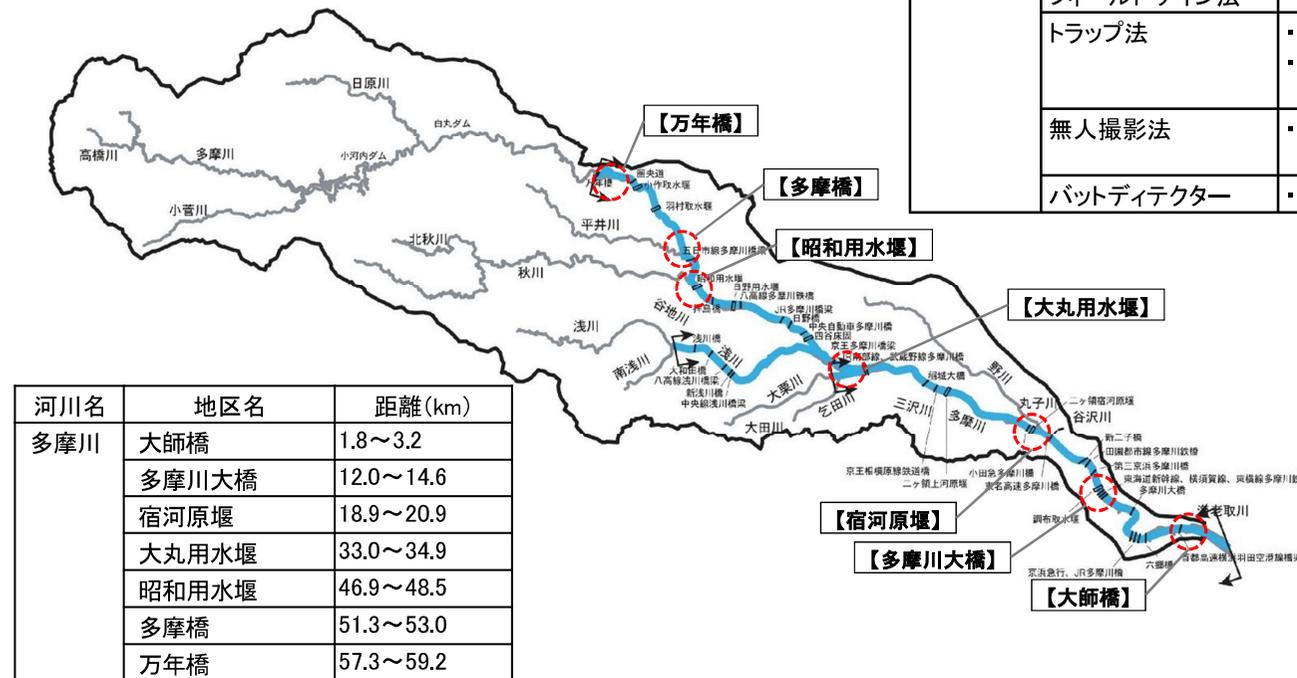


- 出水に伴う両生類・爬虫類・哺乳類の変化をみるための調査は、夏季に実施した。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類)の夏季の結果を用いて比較を行った。

調査内容

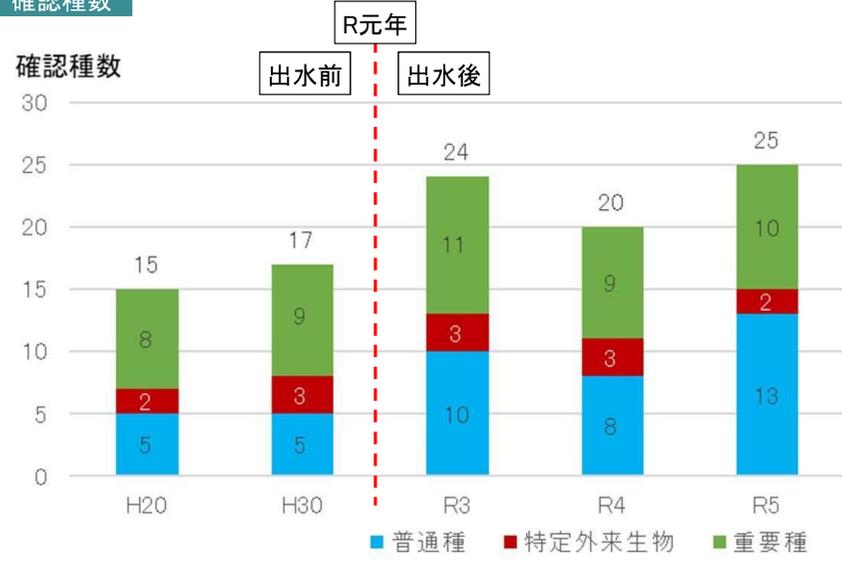
調査時期	調査時期設定根拠	調査年月
夏季 7月下旬～8月上旬	<ul style="list-style-type: none"> <li>・両生類: 遅くに繁殖時期に入る種の確認に適している。</li> <li>・爬虫類: 活動期に入り、確認が容易である。</li> <li>・哺乳類: 活動が活発な時期である。</li> </ul>	<b>【出水前】</b> 平成20年9月 平成30年7～8月 <b>【出水後】</b> 令和3年8月 令和4年7～8月 令和5年8月

調査項目	調査方法	調査方法詳細
両生類	目撃法	・目視による確認。鳴き声による確認を含む。
	捕獲法	・タモ網や素手などによる捕獲。
爬虫類	目撃法	・目視による確認。抜け殻によるヘビ類の確認を含む。 ・夕方に河川構造物周辺などに留意した調査を行う。
	捕獲法	・タモ網や素手などによる捕獲。
	カメトラップ	・1調査地区につき、1個を2晩設置。
哺乳類	目撃法	・目視による確認。鳴き声による確認を含む。
	フィールドサイン法	・足跡、糞、食痕等の痕跡による確認。
	トラップ法	・シャーマントラップやカゴトラップによる捕獲。 ・1調査地区につき、30個を2晩設置し、毎日見回りを実施。
	無人撮影法	・無人撮影装置による確認。1調査地区につき、2台を2晩設置。
	バッドディテクター	・夕方に調査ルートへの踏査による確認。(コウモリ類)



- 令和元年出水後の両生類・爬虫類・哺乳類の確認種数は20～25種であり、出水前の15～17種に比べて増加した。
- 出水後に確認されなかった重要種は、ニホンザルのみであった。ニホンザルは山林に生息する種であるため、調査日と河川敷に降りてきたタイミング、糞などの痕跡が残るタイミングによるものと考えられる。
- 出水後に新たに確認された重要種は、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルなどの5種であるが、出水前の他地区の調査ですべての種が確認されている。
- 特定外来生物はウシガエル、ミシシippアカミミガメ、アライグマの3種であるが、令和5年にミシシippアカミミガメは確認されなかった。

確認種数



特定外来生物



No.	分類	種名	調査年度					外来生物法
			H20	H30	R3	R4	R5	
1	両生類	ウシガエル	●	●	●	●	●	特定外来生物
2	爬虫類	ミシシippアカミミガメ	●	●	●	●		条件付特定外来生物
3	哺乳類	アライグマ		●	●	●	●	特定外来生物
合計		3種	2種	3種	3種	3種	2種	

注)「条件付特定外来生物」は、規制の一部を、適用除外とする種であり、2023年6月1日から規制

重要種数

No.	分類	種名	調査年度					環境省 RL2020	東京都RL2023				神奈川 RDB2006
			H20	H30	R3	R4	R5		区部	北多摩	南多摩	西多摩	
1	両生類	ニホンアマガエル		●	●	●	●		EN	VU	VU	NT	
2		ニホンアカガエル	●	●		●	●		EN	EN	EN	EN	VU
3		トウキョウダルマガエル	●		●		●	NT	CR	CR	EN	EN	VU
4		ツチガエル		●	●	●	●		CR	CR	CR	VU	要注
5		シュレーゲルアオガエル					●		CR	VU	VU	NT	要注
6		カジカガエル				●	●				VU	VU	NT
7	爬虫類	ニホンヤモリ	●		●	●	●		VU	留意種	留意種	留意種	
8		ヒガシニホトカゲ		●	●		●		CR+EN	VU	VU	NT	要注
9		ニホンカナヘビ	●	●	●	●	●		CR+EN	VU	NT	NT	
10		シマヘビ			●				CR	VU	VU	NT	要注
11		アオダイショウ	●	●	●		●		NT	NT	NT	NT	要注
12		ヒバカリ				●	●		VU	VU	NT	NT	NT
13	哺乳類	アズマモグラ	●	●	●				留意種				
14		ニホンザル	●								VU	NT	
15		キツネ			●	●	●		DD	EN			NT
16		イタチ	●	●	●				NT	NT			NT
17		アナグマ		●	○	○			EX	NT			
合計		17種	8種	9種	11種	9種	10種	1種	15種	15種	13種	13種	10種

- : 重要種の指定がない区域での確認
- : 出水前に単年度のみ確認され、出水後に確認がない種
- : 出水後に新たに確認された種

- 出水に伴う鳥類の変化をみるための調査は、基本的に秋の渡りを主として調査するが、河口の大師橋については、越冬するカモ類やカモメ類等を対象として冬季に実施した。
- 確認種の経年比較は、令和元年の出水後の調査と、河川水辺の国勢調査(鳥類)の秋の渡りと越冬期の結果を用いて比較を行った。

調査内容

調査時期	調査時期設定根拠	調査地区	調査年月
秋の渡り	9月 <ul style="list-style-type: none"> <li>多摩川を渡りの中継地として利用するシギ・チドリ等の旅鳥を最も多く確認できる時期である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多摩川大橋</li> <li>宿河原堰</li> <li>大丸用水堰</li> <li>昭和用水堰</li> <li>多摩橋</li> <li>万年橋</li> </ul>	<b>【出水前】</b> 平成25年9月 <b>【出水後】</b> 令和3年9月 令和4年9月 令和5年9月
越冬期	1月中旬～下旬 <ul style="list-style-type: none"> <li>多摩川を越冬のために利用するカモ類、カモメ類等の冬鳥を最も多く確認できる時期である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大師橋</li> </ul>	<b>【出水前】</b> 平成26年1月 <b>【出水後】</b> 令和4年1月 令和5年1月 令和6年1月

調査方法	内容
スポットセンサス法	<ul style="list-style-type: none"> <li>観察定点から河川内の半径200mまでを主とする。</li> <li>観察時間は、1箇所につき10分間（10分間で観察できないほど鳥類がいる場合は最大30分を上限として実施_冬季のカモ類など）</li> </ul>
任意観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>スポットセンサス周辺での任意観察</li> </ul>



【スポットセンサス法】



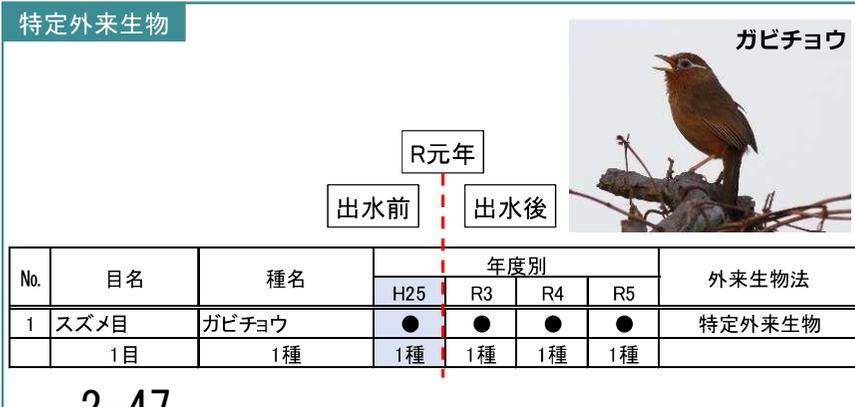
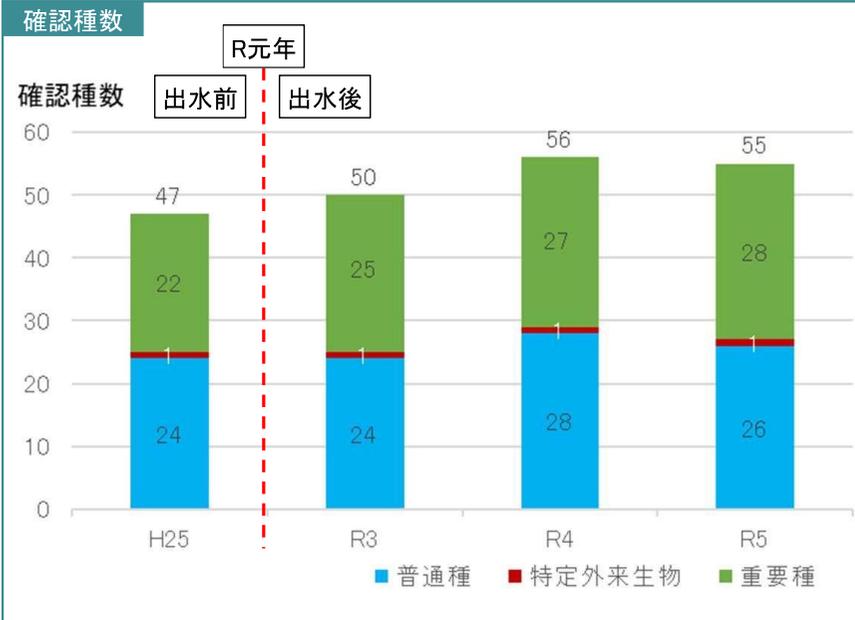
【任意観察】



河川名	地区名	距離(km)
多摩川	大師橋	2.0～3.0
	多摩川大橋	8.0～9.0
	宿河原堰下流	21.5～22.5
	大丸用水堰下流	31.5～32.5
	昭和用水堰下流	47.0～48.0
	多摩橋	50.0～51.0
万年橋	61.0～62.0	

※平成16年度の鳥類調査は、調査方法(3km程度のラインセンサス法)や調査地区が異なっていることから、出水後の調査との比較は困難と考えた。

- 令和元年出水後の鳥類の確認種数は50～56種であり、出水前の47種に比べてやや増加している。
- 出水後に確認されていない重要種は、ゴイサギ、チュウサギ、ハマシギ、ウミネコの4種であった。ゴイサギの生息・餌場となる瀬淵、チュウサギの生息・餌場となる湿地、ハマシギの生息・餌場となる干潟などは存在している。また、ウミネコは主に海岸から河口付近に生息している種であり、出水等に伴う影響は不明であった。
- 令和5年にクイナとノスリの2種の重要種が確認され、出水後(令和2年以降)においては25～28種の重要種が確認されている。
- 特定外来生物は、ガビチョウ1種のみで変化はみられなかった。



**重要種数**

出水前 | 出水後

No.	目名	種名	調査年度				種の保存	環境省 RL2020	東京都RDB2023				神奈川県 RDB2006		
			H25	R3	R4	R5			区部	北多摩	南多摩	西多摩			
1	キジ目	キジ	●	●	●	●		EN	NT	NT	NT				
2	カモ目	ホシハジロ	●	●	●	●		VU	VU	VU					
3		スズガモ	●	●	●	●		留意種							
4	カイツブリ目	カイツブリ	●	●	●	●		NT	VU	NT	NT				
5		カンムリカイツブリ	●	●	●	●		留意種	留意種	NT	NT				
6	ペリカン目	ゴイサギ	●	●	●	●		VU	VU	VU	NT				
7		ダイサギ	●	●	●	●		NT							
8		チュウサギ	●	●	●	●	NT	NT	NT	NT	NT				
9		コサギ	●	●	●	●		VU	NT	NT	NT				
10	ツル目	クイナ	●	●	●	●		DD	DD	NT	NT	Ⅱ類			
11		バン	●	●	●	●		EN	EN	VU	VU				
12		オオバン	●	●	●	●		CR							
13	カッコウ目	ホトギス	●	●	●	●					NT	NT			
14	アマツバメ目	ヒメアマツバメ	●	●	●	●		VU	NT	NT	DD	減少			
15	チドリ目	イカルチドリ	●	●	●	●		EN	VU	VU	NT	NT			
16		コチドリ	●	●	●	●		CR	NT	VU	NT	注目			
17		イソシギ	●	●	●	●		VU	VU	VU	VU	希少			
18		ハマシギ	●	●	●	●		NT	VU	EN	EN	VU			
19		ウミネコ	●	●	●	●		留意種							
20	タカ目	ミサゴ	●	●	●	●		NT	EN	VU	EN	DD	VU		
21		トビ	●	●	●	●			NT		NT				
22		チュウヒ	●	●	●	●	指定	EN	EN				VU		
23		ツミ	●	●	●	●		EN	VU	NT	NT	VU			
24		オオタカ	●	●	●	●		NT	EN	VU	VU	VU	VU		
25		ノスリ	●	●	●	●		CR	VU	VU	NT	VU	Ⅱ類		
26	ブッポウソウ目	カワセミ	●	●	●	●		VU	NT	NT	NT				
27	ハヤブサ目	チョウゲンボウ	●	●	●	●		EN	VU	VU	NT				
28	スズメ目	モズ	●	●	●	●		CR	VU	NT	NT	減少			
29		オナガ	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT				
30		ツバメ	●	●	●	●							減少		
31		ウグイス	○	○	●	●							留意種		
32		オオヨシキリ	●	●	●	●		CR	VU	VU	VU	VU	VU		
33		ヨシキリ属※	●	●	●	●		CR	VU	VU/DD	VU/DD	Ⅱ類/Ⅲ類			
34		セッカ	●	●	●	●		CR	VU	VU	VU	減少			
35		イソヒヨドリ	●	●	●	●		NT	NT	NT	DD				
36		キセキレイ	●	●	●	●							減少		
37		セグロセキレイ	●	●	●	●		VU	NT	NT			減少		
38		カワラヒワ	●	●	○	●							減少		
39		イカル	●	●	●	●		NT	NT						
40		ホオジロ	●	●	●	●		EN	NT	NT	NT				
41		オオジュリン	●	●	●	●		NT	NT	NT	NT	VU			
			12目	40種	22種	25種	27種	28種	1種	6種	36種	30種	31種	28種	20種

※ヨシキリ属はオオヨシキリ又はコヨシキリの可能性があるが、“ぐぜり”での確認であり、ヨシキリ属とした。選定基準については、オオヨシキリおよびコヨシキリのランクを記載した。  
 ●: 出水後に確認された種  
 ○: 出水後に確認されない種  
 ○: 重要種の指定がない区域での確認

- 河川整備基本方針変更(令和5年3月)の主な注目種(掲載種)であるハマシギ、カイツブリ、イカルチドリ、コチドリ、オオヨシキリ、セグロセキレイについて整理した。
- 各地区の確認状況を見ると、平成25年度に確認された種は、出水後の調査でも概ね確認されているが、ハマシギは、出水後の確認がなかった。ハマシギは冬鳥で秋に多摩川河口部を渡りの中継地として利用する。ハマシギの餌場となる干潟は存在しているため、調査日と渡来状況のタイミングによって確認しにくい可能性が考えられた。

注目種

No.	目名	種名	セグメント1																							
			セグメント3								セグメント2-2				セグメント2-1				セグメント1							
			下流部				中下流部				中上流部				上流部											
大師橋		多摩大橋		宿川原堰		大丸用水堰		昭和用水堰		永田橋		万年橋														
H25	R3	R4	R5	H25	R3	R4	R5	H25	R3	R4	R5	H25	R3	R4	R5	H25	R3	R4	R5	H25	R3	R4	R5			
1	チドリ目	ハマシギ	●																							
2	カイツブリ目	カイツブリ		●	●	●	●														●	●	●			
3	チドリ目	イカルチドリ				●			●																	
4	チドリ目	コチドリ																								
5	スズメ目	オオヨシキリ																								
-	スズメ目	ヨシキリ属※																								
6	スズメ目	セグロセキレイ																								

※ヨシキリ属はオオヨシキリまたはコヨシキリの可能性があるが、ぐぜりでの確認であり、種の同定が困難なため、ヨシキリ属とした。  
 選定基準については、オオヨシキリおよびコヨシキリのランクを記載した。  
 ※赤点線は、令和元年の出水の前後を示す

オオヨシキリは夏鳥であり、  
 秋季調査では確認しにくい



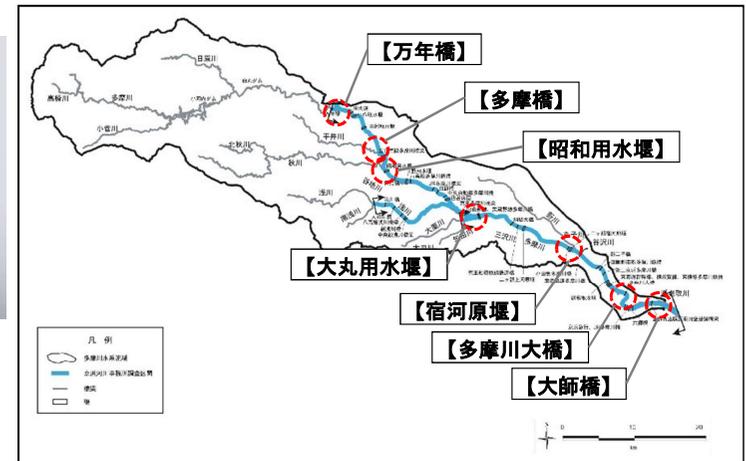
【イカルチドリ】



【セグロセキレイ】



【オオヨシキリ】



項目	出水後の変化
植物	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水前の植物の確認種数は349～428種であり、出水後は256～353種と減少した。</li> <li>出水前に継続的に確認されていたウマノスズクサ、ホソバハマアカザとミゾコウジュ、カワラノギクの4種は、出水後の確認はない。しかしながら、ウマノスズクサは堤防法面にみられていた種であり、生息の可能性が高い。他の3種は出水後の他調査において別途地点で確認されている。</li> <li>出水後の植物群落の変化をみると、出水後の翌年は自然裸地が広がり、その後、一年生草本に遷移したが、一部では出水前のオギやツルヨシ群落などに戻ってきている箇所もみられる。</li> </ul>
底生動物	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水で出水前の226～270種から、令和2～3年には225～230種に減少したが、令和4年以降、287～291種と増加傾向になっている。</li> <li>出水直後、砂やシルトがほとんど流され、大きい粒径の礫が主たる河床材料となったため、令和4年まで固着型の個体数が増加していたが、洪水から数年が経過して、砂やシルトが再び増えてきたことから、令和5年からは掘潜型の個体数が増加傾向になっている。</li> <li>重要種では、出水後に確認されていない種が8種あり、その内5種は汽水域に生息する種であった。</li> </ul>
陸上昆虫類	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水後の陸上昆虫類の確認種数は548～588種であり、出水前の557～713種に比べて減少した。重要種の種数も、出水後は23～26種であり、出水前の24～37種に比べて減少している。</li> <li>出水前に継続的に確認されていたオオイトトンボとギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリは、出水後の確認はない。オオイトトンボが生息するワンドやたまりや、ギンイチモンジセセリとミヤマチャバネセセリの幼虫の食草となるススキやヨシ、チガヤなどのイネ科植物は存在するため、今後、周辺地域からの飛来による個体群の供給が期待される。</li> </ul>
魚類	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水後の魚類の確認種数は45～52種であり、出水前の44～49種とほぼ同程度であった。</li> <li>出水前に単年度のみ確認されたクルマサヨリ、または、出水前に確認が途絶えたトビハゼ、トウヨシノボリを除くと、ヒメハゼを除くすべての重要種が出水後も確認されている。</li> <li>ヒメハゼは汽水域の砂底、砂泥底に生息する種であり、多摩川では下流側の地区で多くの個体(H28,H23)が捕獲されており、河口に生息している可能性がある。</li> <li>個体数が多い上位10種の出水後の変化をみると、瀬に繁殖するオイカワなどの種は一時的に個体数が増加した。ただし、アユは減少した。出水時期と繁殖時期が重なり、翌年の繁殖時期には温水であったことが影響と考えられた。</li> <li>H28とR3の水国の地区別の種数を比較すると、浅川合流部と日野用水堰下流では種数が減少した。河岸が侵食され、淵に土砂が堆積したことで平坦な河床になったためと考えられた。他の地区の種数は同程度かやや増加している。</li> </ul>
両生類・爬虫類・哺乳類	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水後の両生類・爬虫類・哺乳類の確認種数は20～25種であり、出水前の15～17種に比べて増加した。</li> <li>出水後に確認されなかった重要種は、ニホンザルのみであった。ニホンザルは山林に生息する種であるため、調査日と河川敷に降りてきたタイミング、糞などの痕跡が残るタイミングによるものと考えられる。</li> </ul>
鳥類	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和元年出水後の鳥類の確認種数は50～56種であり、出水前の47種に比べてやや増加している。</li> <li>出水後に確認されていない重要種は、ゴイサギ、チュウサギ、ハマシギ、ウミネコの4種であった。ゴイサギの生息・餌場となる瀬淵、チュウサギの生息・餌場となる湿地、ハマシギの生息・餌場となる干潟などは存在している。また、ウミネコは主に海岸から河口付近に生息している種であり、出水等に伴う影響は不明であった。</li> </ul>

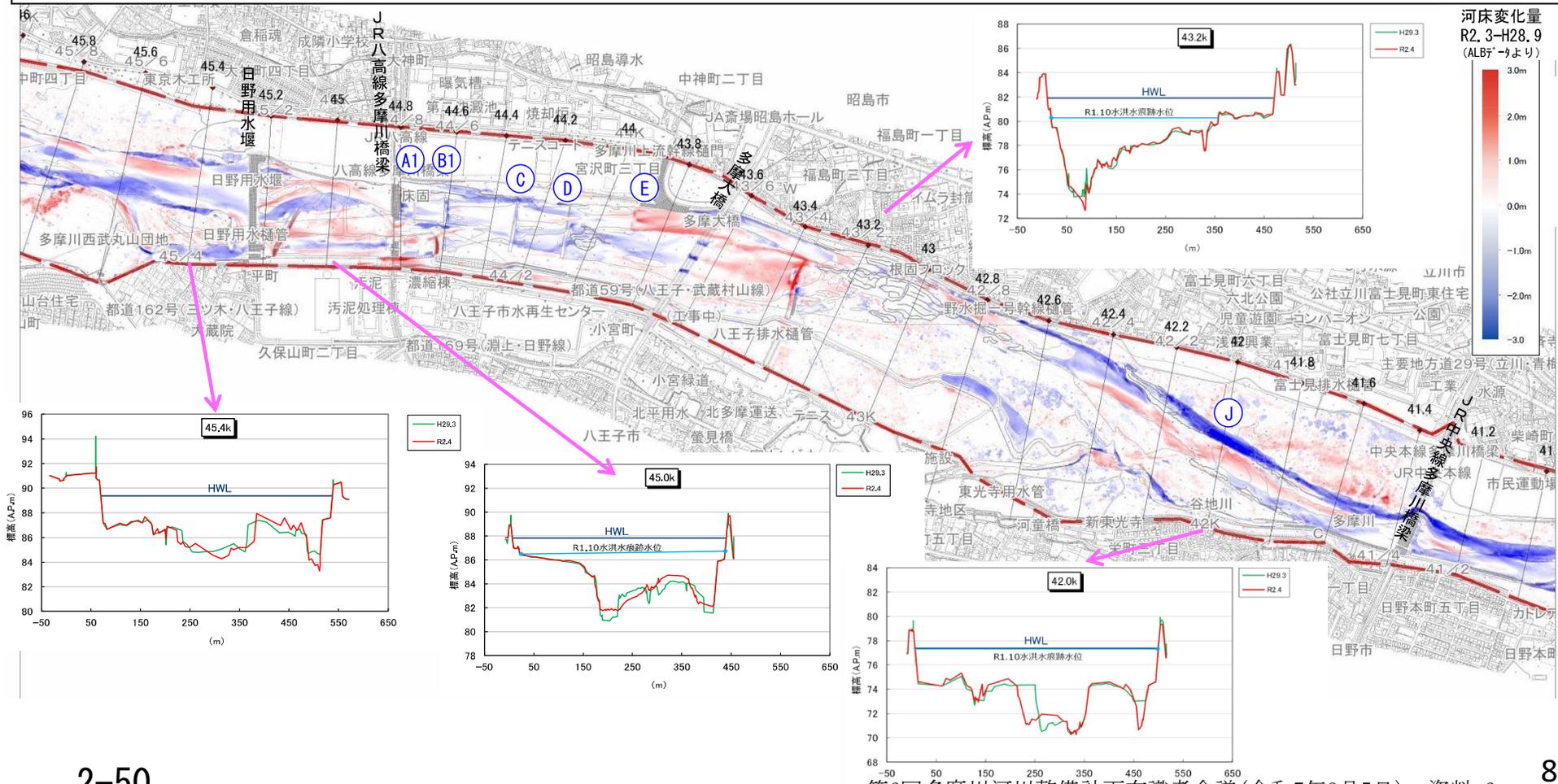
# 【多摩大橋周辺地区】

参考資料2

## 令和元年東日本台風による洪水状況（洪水前後の河床変化図）

### ◆H28.9～R2.3における河床の変化状況＜多摩大橋周辺地区（全体）＞

- 42.6k下流では、低水路左岸の河岸部において連続的に河岸侵食が見られる一方で、高水敷部では若干堆積している。
- 43.0k付近の土丹層露出箇所では、大きな河床変動は見られない。
- 帯工E下流部～43.4k付近では堆積傾向になっている。
- 八高線下流の帯工A～Eでは全体的に河床低下傾向になっているが、低水路幅が広がったことによるもの。
- 八高線上流では、全体的に低水路部の河床低下が見られる。

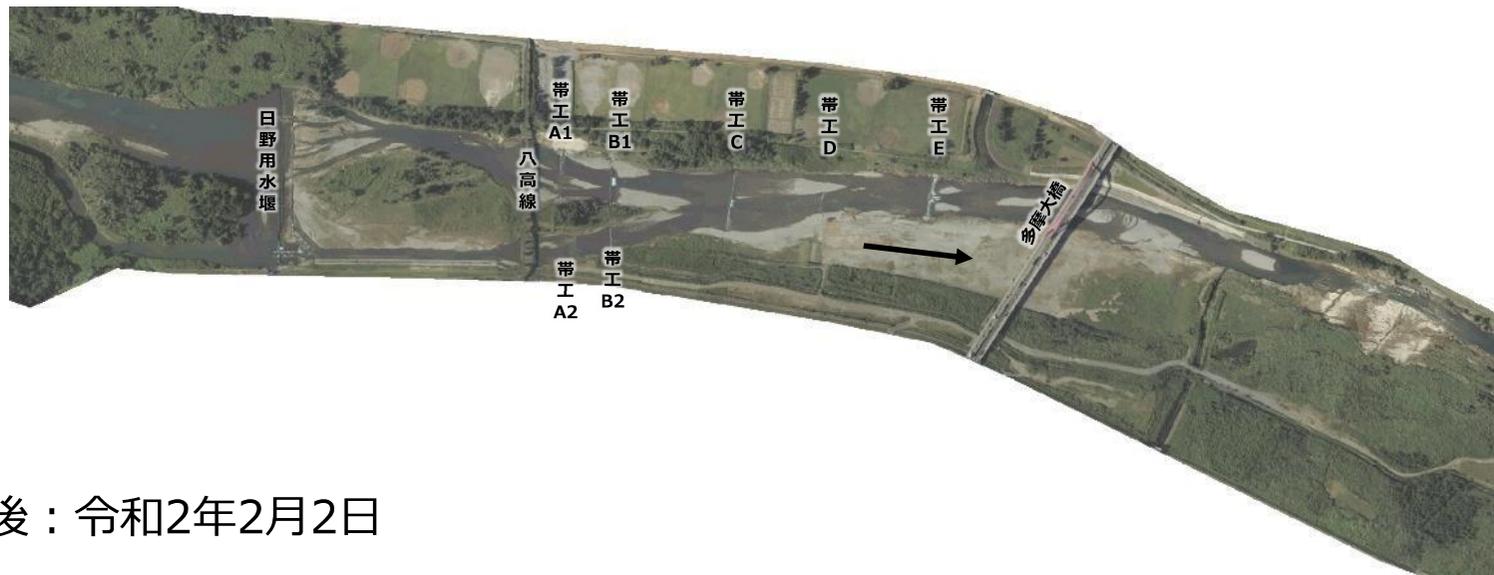


【多摩大橋周辺地区】

令和元年東日本台風による洪水状況（洪水前後の河道変遷（航空写真））

参考資料2

洪水前：平成28年9月9日



洪水後：令和2年2月2日

